

縄文時代晩期における大洞貝塚の学史的意義

小林圭一

1 はじめに

岩手県大船渡市に位置する大洞貝塚^{おおほら}は、縄文時代晩期の標式遺跡として知られている。1925（大正14）年の発掘調査で出土した土器をもとに、山内清男氏（1902－1970年）が亀ヶ岡式土器の年代の変遷を「大洞」の型式名を冠して明確にした（山内1930）。即ち大洞B式→大洞BC式（未命名の一型式）→大洞C1式（同C旧型式）→大洞C2式（同新型式）→大洞A式→大洞A'式の6型式にわたる変遷で、大洞貝塚の出土地点と層位の比較を前提に、土器の型式の特徴を属性毎に分解し、それらの組み合わせから型式区分を求めるものであった（図7・表4）。この細別が発表されてから一世紀近い歳月が経過したが、今日においても亀ヶ岡式土器研究の基本原則となっている。

大洞貝塚は1925年の調査を嚆矢として、後述するように発掘調査が断続的に実施されてきており、その結果大船渡湾貝塚群を代表する遺跡として、2001年8月13日付けで国史跡に指定されている。しかし発掘調査報告書が刊行されたのは、1994年以降の大船渡市教育委員会による調査からで、それ以前に実施された調査の詳細が示されることはなかった。

本稿では、縄文時代の最も著名な遺跡である大洞貝塚の調査歴を整理して、同貝塚の学史的意義を再確認する。5箇所⁵に点在する地点貝塚であるが、各地点の形成時期を跡づけて、標式遺跡としての特性の明確化に努めていきたい。

2 大洞貝塚の概要

(1) 大洞貝塚の名称

大洞貝塚は岩手県大船渡市赤崎町字大洞（旧気仙郡赤崎村大洞）に所在する。1925年に発掘調査した長谷部言人氏⁶がその報告（長谷部1925b）で、「おおほら」貝塚として学会で紹介したことから、「おおほら」という

名称が一般に流布してきたが、地元では「おおほら」と呼称されている。「洞」^{ほら}は、穴や谷、木が多く生えた山間の土地などを表しており、「大洞」は大きな沢という意味と解釈されている（大船渡市1978：397頁）。該域においては、大股山^{おおまたやま}付近に源を発し、貝塚が乗る丘陵の先端を西流する後ノ入川^{のちのいり}を指示したのであろうか。

また「舞良貝塚」^{もうりよう}の別称が存している。「舞良」は地元の素封家金野家の屋号で、舞良庵という小堂がこの丘陵にあったとの伝説に因んでいる。1925年の調査以前の記録には舞良貝塚の記載が見られることから、長谷部氏報告前は同貝塚名が一般に通用していたと推測されている¹⁾。

(2) 大船渡湾周辺の縄文晩期の遺跡

三陸海岸から仙台湾にかけた海域は、暖流（黒潮）と寒流（親潮）が接触する潮目に当たり、多くの魚類が集まる好漁場となっており、縄文時代においても漁撈具の骨角器が発達した地域として特筆されている。三陸海岸は陸前・陸中・陸奥にまたがる海岸という意味で、青森県八戸付近から宮城県牡鹿半島までの太平洋沿岸域を指す。複雑に入り組んだリアス海岸の典型で、海岸線は岬と奥深い入江が交互に連続して屈曲しており、入江の湾奥には流入する河川による小規模な平野が形成され、その背後や岬には急峻な北上山地が迫っている。三陸海岸は宮古湾を境にそれより北側の「三陸北部沿岸域」、宮古湾から気仙沼湾までの「三陸中部沿岸域」、気仙沼湾を境にそれより南側の「三陸南部沿岸域」とに三分され、大船渡湾と広田湾は「三陸中部沿岸域」の南端に該当する。

大洞貝塚が位置する気仙地方には、縄文時代の遺跡が数多く分布しており、大船渡湾と広田湾に限定した図郭（図4）では、211遺跡に及んでいる。その内貝塚は37遺跡で、縄文海進のピークを迎えた前期中葉大木2b式頃（大船渡湾：内田貝塚、広田湾：牧田貝塚）に形成が始まる。大洞貝塚と同時期の縄文時代晩期の貝塚

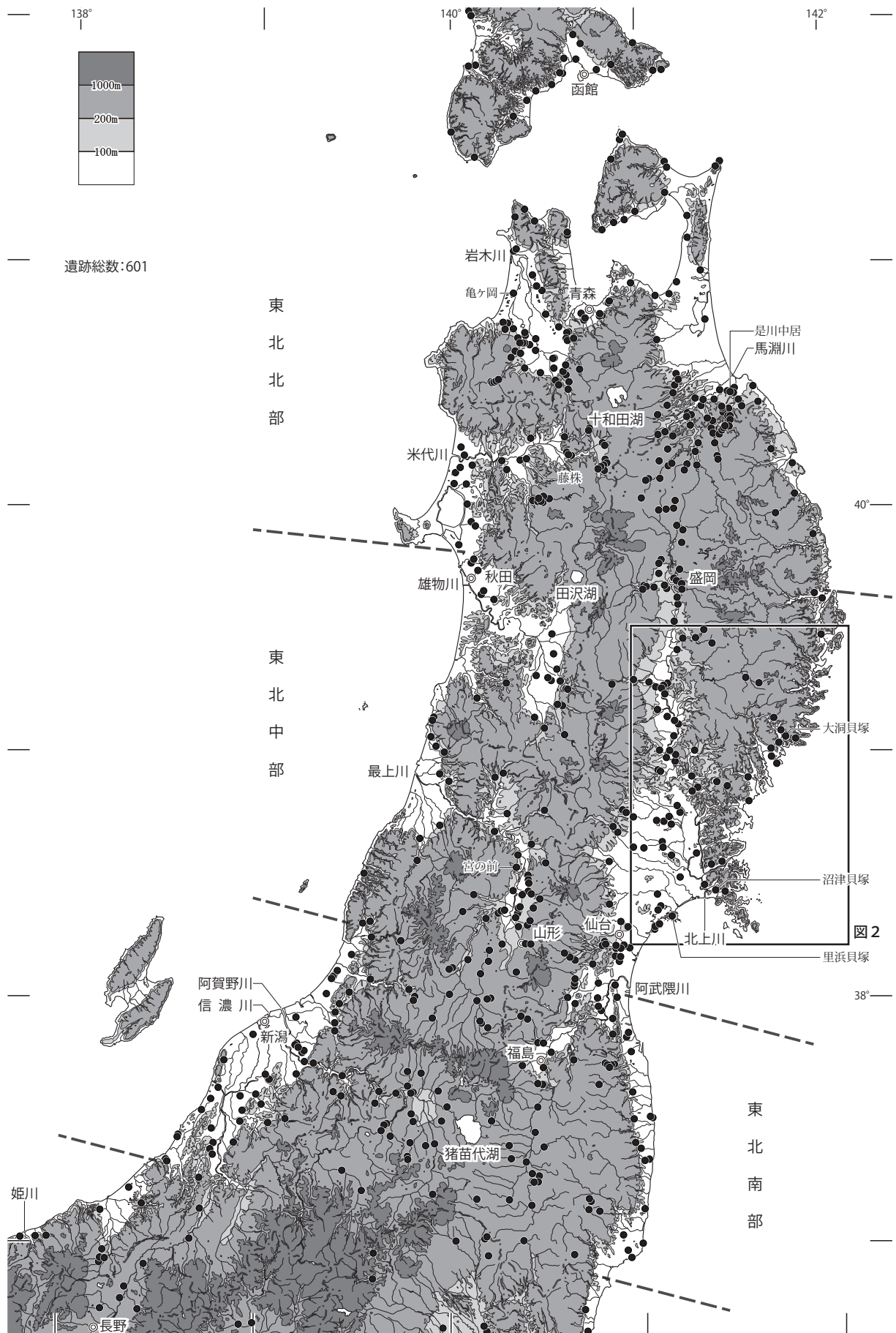


図1 東北地方の地域区分と縄文時代後期後葉～晩期末葉（弥生前期を含む）の主要遺跡（縮尺：1/2,500,000）

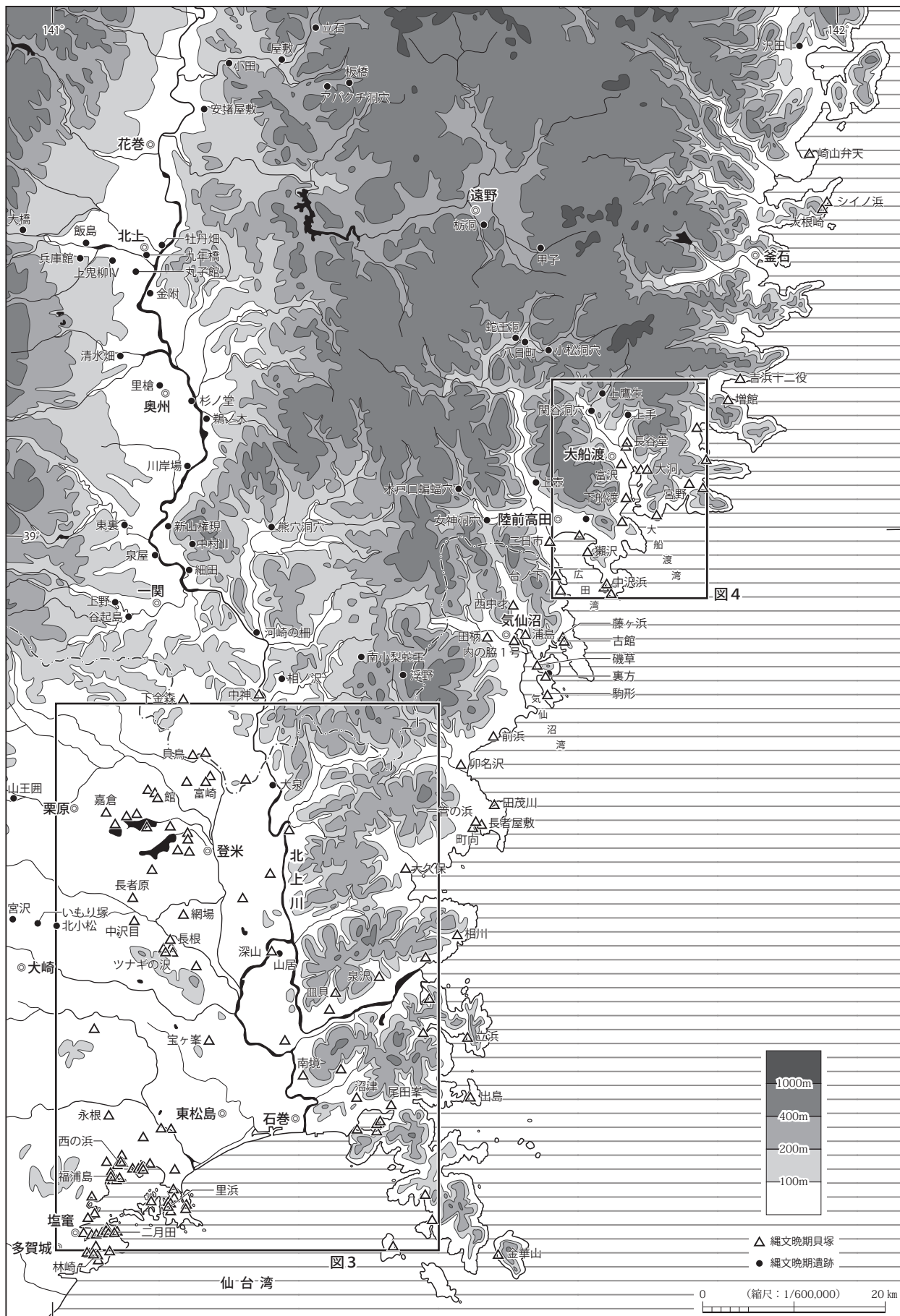


図2 東北中部太平洋沿岸地域の縄文時代晩期の貝塚と主要遺跡 (縮尺: 1/600,000)

は 19 遺跡で、明確な晩期遺跡の総数は 29 遺跡を数えるが、貝塚以外の晩期遺跡は 10 遺跡と思いのほか少ない。

大洞貝塚は大船渡湾の湾奥東岸の丘陵上に立地しており、湾奥の盛川東岸の河成段丘上に長谷堂貝塚、湾西岸の丘陵上に下船渡貝塚が有力遺跡として並存していた。また大洞貝塚対岸の富沢貝塚は骨角器類を豊富に出土した遺跡として知られており、1958 年の調査では、後期末葉から晩期全般にわたる遺物が確認され、特に大洞 C1～A' 式の土器が主体を占めていた。

大船渡湾の貝塚以外の晩期遺跡では、盛川支流の鷹生川流域の上鷹生遺跡、同じく立根川流域の上手遺跡が上げられる。特に前者は 1991～1992 年に発掘調査が実施され、後期中葉～晩期後葉の住居跡や捨場跡、墓域等が検出されている(岩手県埋文セン 1997)。周囲に晩期の遺跡が点在することから、山間部の拠点集落であったと推定される。また長谷堂貝塚に東接した善蔵敷遺跡は、後期後葉主体の遺跡となっている(大船渡市 1978)。

大船渡湾の湾口北側の綾里漁港に面した宮野貝塚は、大洞貝塚の東方約 5 km に位置しており、東方に綾里湾を望む。7 地点(A～G 地点)から構成された縄文時代前期～弥生時代前期の地点貝塚で、1940 年以降 25 回にわたって発掘調査が実施され、晩期では大洞貝塚に並存していた。

陸前高田市と気仙沼市(宮城県)の市域となる広田湾周辺には、東岸の瀬沢貝塚と中沢浜貝塚、西岸の台の下貝塚が有力遺跡となる。前二者は古くから知られた縄文時代後・晩期の貝塚であるが、台の下貝塚は 2013～2014 年に発掘調査が実施され、縄文時代中期後葉～後期前葉に主体があった。後期後葉～晩期末葉の遺構(土坑墓 3 基、土器埋設遺構 1 基)が検出され、土器も豊富に出土したが、該期の貝層は確認されていない(気仙沼市教委 2021)。

広田湾の貝塚以外の晩期遺跡では、広田湾に注ぐ浜田川右岸の川内遺跡(1999～2000 年調査)が、縄文時代中期後葉～弥生時代前期の遺跡となっている(陸前高田市教委 2003)。気仙川流域では、上壺遺跡(図 4 西側図郭外)が晩期の有力遺跡となろう。遺跡の詳細は定かでないが、大船渡市立博物館に亀ヶ岡式土器の優品が

収蔵されている(大船渡市 1978)。

気仙地方の山間部の石灰岩露頭には、洞穴遺跡が特徴的に分布する。図 4 には「上鷹生遺跡群」の関谷洞穴のみ図示されているが、広田湾に注ぐ気仙川とその支流には、女神洞穴・木戸口蝙蝠穴・蛇王洞穴・小松洞穴等が位置している(図 2)。狩猟に際してのキャンプ地として、また埋葬地としても利用されていたのであろう。

(3) 大洞貝塚各地点の概要

大洞貝塚は大船渡湾奥東岸の丘陵上に位置している。現在の海岸から直線で 600 m 程離れているが、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災時は遺跡範囲西端の標高 10 m 付近まで津波が到達しており、縄文時代の貝塚形成期には遺跡直近の北西側低地付近までが入江になっていたと推定されている。

大船渡湾の東岸には丘陵地がほとんど見られないが、大洞貝塚が位置する周辺が唯一の丘陵地となっており、貝塚が乗る丘陵は「大洞丘陵」と仮称されている(大船渡市教委 2002: 17 頁)。この丘陵は大股山(標高 612.7 m)に続く支脈の先端に当たり、後ノ入川の扇状地に向かって西北方向に突出し緩やかに起伏しており、貝塚はその鞍部の北斜面と南斜面に形成されている。三方を山で囲まれており、丘陵頂部に立つと赤崎町生形地区を眼下に、西北の盛川河口方向に僅かに海を望むことはできるが、貝塚のある丘陵東南の鞍部付近からは、海を望むことができない。丘陵の北側と南側には東南から西北に流れる二本の沢筋があり、地元では北の沢筋を「刈集沢」、南の沢筋を「舞良沢」と称している。

大洞貝塚は A・A'・B・C・D 地点の 5 箇所に点在する貝塚で構成されるが、A・A'・B 地点が刈集沢に臨む北斜面、C・D 地点が舞良沢に臨む南斜面に形成されている。その内 A 地点と A' 地点は比高差約 2 m の法面で区切られ、法面上位が A 地点、その下位が A' 地点となっているが、貝層の広がりには連続しており、「固より同一貝塚と見なすべきものである」(長谷部 1925b: 359 頁)と指摘されている。南斜面は鞍部東側地区、D 地点貝塚周辺の地区、C 地点貝塚周辺の地区と、法面が切られて 3 段の段差になっている。なお傾斜地に作られた崖境を地元では「ママ」と呼称しており、以下ではこの法面をママと表すことにする。

大洞貝塚の現在の遺跡範囲は、標高 20～30 m の舌

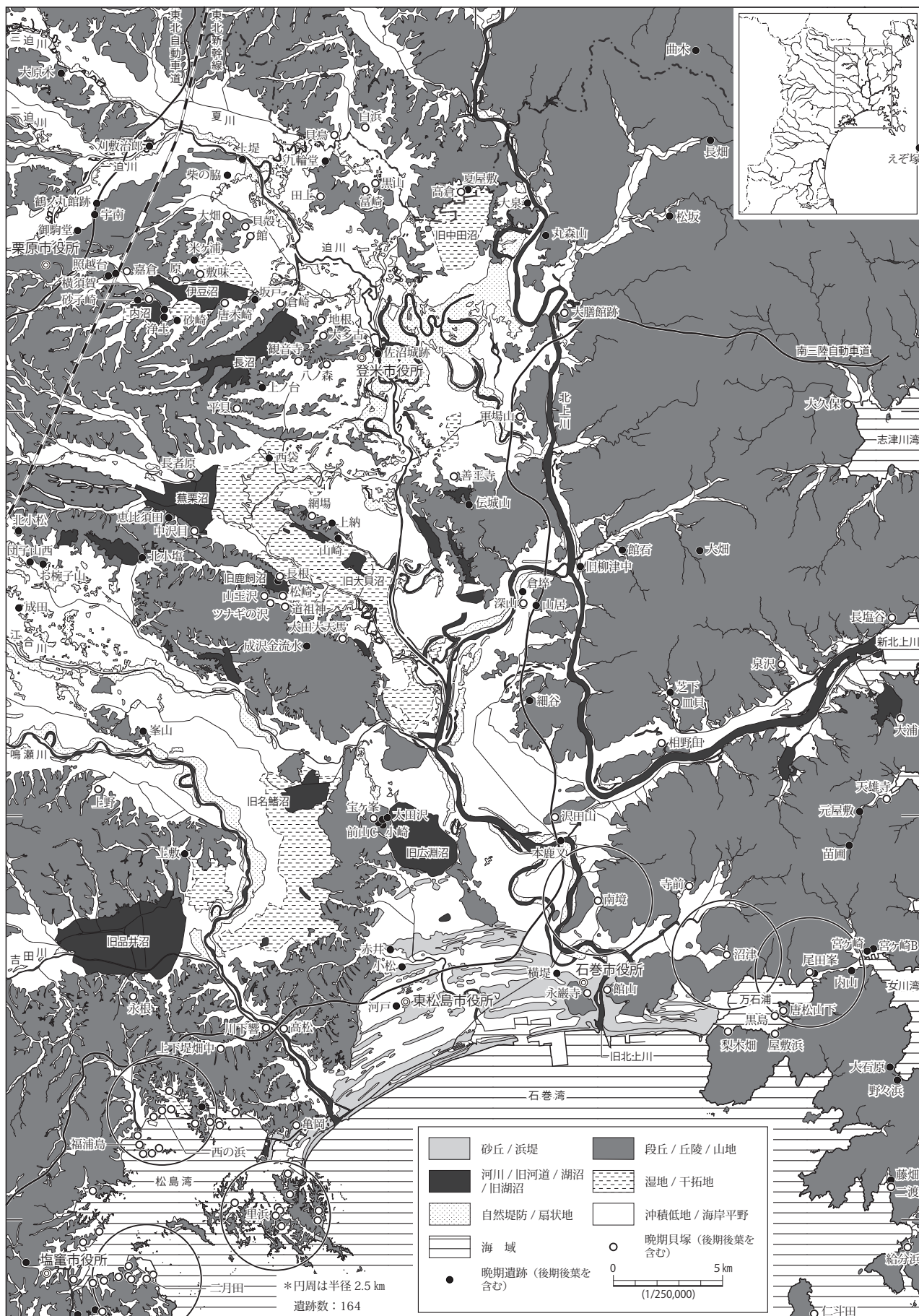


図3 北上川下流域及びその周辺地域の地形分類と縄文晩期の遺跡分布 (縮尺: 1/250,000)

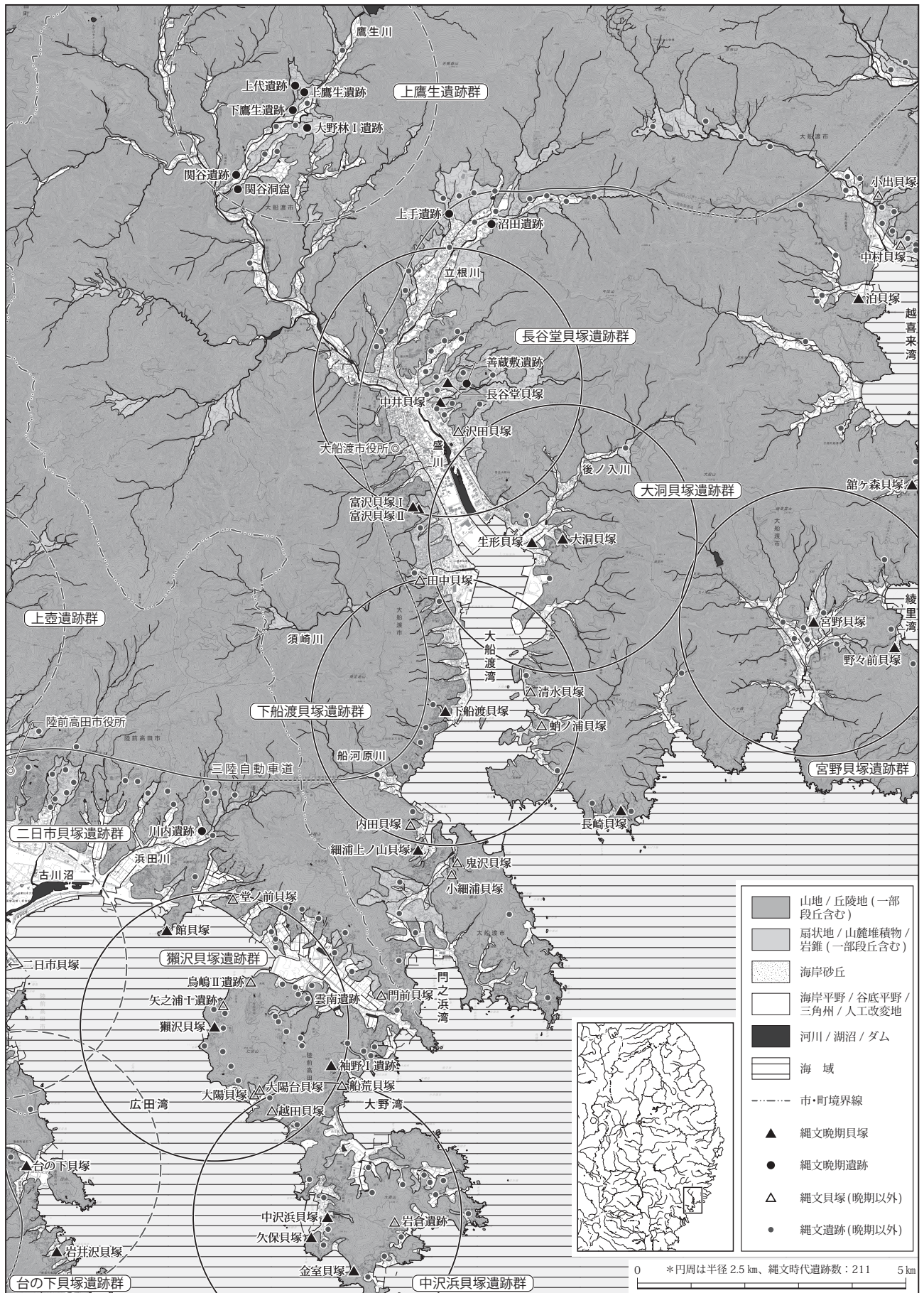


図 4 大船渡周辺における縄文時代の遺跡分布 (縮尺: 1/100,000)

状の丘陵地と南側の沢筋（舞良沢）から構成されており、東西幅 500 m、南北幅 200 m の範囲で、面積は約 73,000 m² を測る（図 5）。遺跡範囲の北側ラインは三陸鉄道南リアス線が並走し、南側ラインは沢筋の南縁に沿った道路で区切られる。

A 地点と A' 地点の貝塚は比高差 2 m のママで画されているが、ママは後世の切土で、本来は一体の貝塚であった（図 6）。両地点を合わせた散布範囲は東西 33 m、南北 23 m で、面積は約 510 m² を測る。貝塚は標高 18 ~ 23 m の北側斜面に形成されており、上段の A 地点が標高 22 ~ 23 m の平坦面、下段の A' 地点が標高 18 ~ 20 m の緩斜面となる。C 地点を裁ち切って丘陵に入る小道を上ると鞍部から東方に下るが、その左側（北側）に当たり、小道を挟んで並列した B 地点とは 10 m 程しか離れていない。ママ付近で貝殻や土器片の散布が濃密に見られ、斜面が下がるに従い希薄となる。長谷部言人氏は両地点を「大洞西貝塚」と併称している（長谷部 1925b）。

B 地点の貝塚は A 地点の南東方の標高 20 ~ 24 m の北側斜面に形成されている（図 6）。丘陵鞍部を横断する小道を東方に下ると、小道の右側（南側）が一段高くなっている。法面の上一帯に東西約 25 m、南北約 15 m の範囲で貝殻が散布しており、面積は約 330 m² を測り、南東端の丘陵鞍部の際は 1987 年の宅地造成により、斜面が切土されている。長谷部氏は同地点を「大洞東貝塚」と併称している。

C 地点の貝塚は、大洞丘陵の標高 17 m 前後の南側斜面に形成されている（図 6）。南側沢筋（舞良沢）から丘陵に上る小道の東西に貝層が広がっており、散布範囲は東西約 40 m、南北約 15 m で、面積は約 480 m² を測る。小道西側が 1925 年と 1960 年に発掘調査されたが、現況の地表面は平坦になっている。この平坦面は、1988 年に南側対岸の丘陵の北斜面を宅地開発した際に、掘削した土砂を 1 m 程盛土したもので、造成前は緩斜面で北半が畑地、南半が水田となっていた。また小道東側の民家は 1890（明治 23）年に斜面を切り盛りして造成されたが、2000 年に建て替えられた際に、大船渡市教育委員会が発掘調査を実施している。その結果、東側に広がる混貝土層は西方の貝層の流れ込みで、貝層の東縁辺に相当することが確認されている（大船渡市教委

2002）。長谷部氏は同地点を「大洞南貝塚」と併称しているが、小道西側の貝層の大半に調査が及んでおり、手付かずの貝層（原堆積貝層）は限定的である。また湧水のため、発掘が困難であったことが報告されている。

D 地点の貝塚は、標高 20.5 ~ 22.5 m の南側斜面に形成されている（図 6）。C 地点から北へ小道を上ると、東側に民家があるが、この民家は慶応義塾大学調査（1960 年）以降の 1968 年に建設されたもので、その際に丘陵鞍部から南側斜面を約 2 m の高さで切土しており、更に東方の丘陵頂部と D 地点の間にも比高差 2 m の法面（ママ）が続いている。法面下端付近が比較的平坦で、明治初期に民家があったとされることから、この法面は明治期の民家建設時の造成によるものと考えられている。D 地点には遺物の散布が認められ、早稲田大学が 1958 年に作成した測量図に貝層の広がり記録されており、1960 年に D 地点として慶応義塾大学により発掘調査されている。1925 年の長谷部氏の報告に同地点への言及がなく、往時は貝層が表土に覆われ、目視できなかったと推定されている（大船渡市教委 2000:156 頁）。なお大船渡市教育委員会のボーリング調査では、貝層の散布範囲は東西約 20 m、南北約 10 m で、面積は約 170 m² を測り、大洞貝塚の中では最も規模の小さな地点となる。

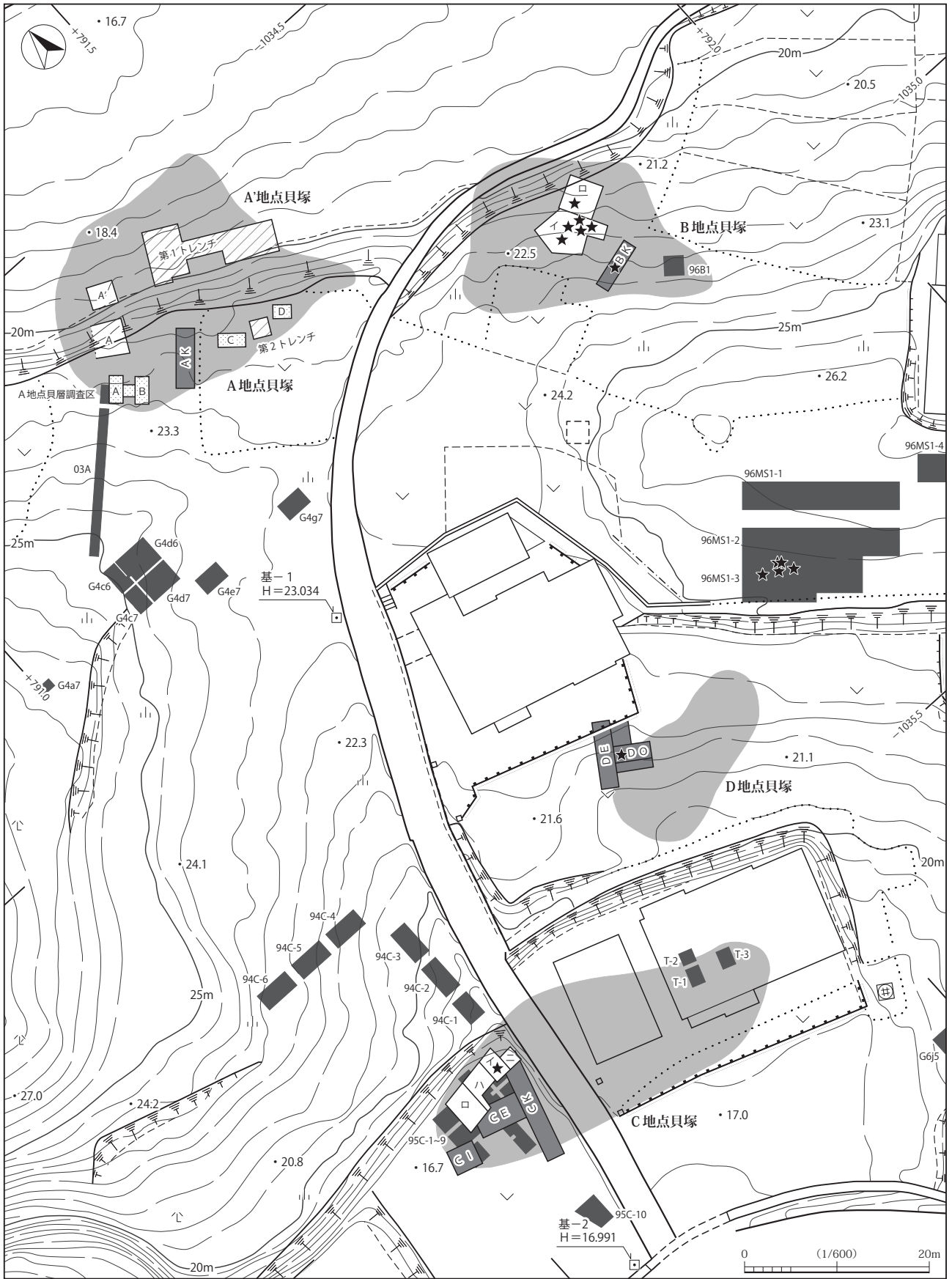
（4）大洞貝塚出土の自然遺物

大洞貝塚出土の貝類はアサリを主とし、オニアサリ・ウチムラサキ・オオノガイ・ホタテガイ・アカザラガイ・エゾギンチャク・アカガイ・マガキ・マテガイ・サルボウ・ホッキガイ・カガミガイ・イガイ・ミルクイ（以上二枚貝類）、ウニミナ・アカニシ・エゾタマガイ・ツメタガイ・スガイ・レイシ・アラムシロ・イシダダミ・イボニシ（以上巻貝類）等が出土している。アサリ等の内湾浅海の砂底・砂泥底、スガイ等の岩礁・岩礫底、ウチムラサキ・アカガイ・ホタテガイ等の水深約 10 m 位を棲息域とするものなど、多様な貝類が採捕されている。アサリは大船渡湾の他の貝塚でも優位を占めている。またホタテガイは今日養殖以外ほとんどみることができない。

魚類はマグロ・ブリ・カツオ・マダイ・スズキ・サバ・フグ類・サメ類等の魚骨が出土している。マグロ等の外洋性の回遊魚が比較的多く、クジラ・イルカ等の水生動物も認められる。



図 5 岩手県大船渡市大洞貝塚全体図 (大船渡市教委 2004) 改変



1925年長谷部調査区
 1956年慶応調査区
 1958年早稲田調査区
 1960年慶応調査区
 大船渡市教委調査区
 人骨出土地点

図6 岩手県大船渡市大洞貝塚トレンチ配置図 (縮尺: 1/600)

鳥類はヤマドリ・カモ類等、獣類ではイノシシ・ニホンシカを主に、イヌ・サル・キツネ・テン・ウサギ等の骨が出土している。

3 大洞貝塚調査前史 (1925年調査前の経緯)

(1) 史蹟名勝天然記念物保存法 (1919年) 施行以前の状況

気仙地方の貝塚研究は、気仙郡小友村(現陸前高田市小友町)出身の鳥羽源蔵氏²⁾が、1896年『東京人類學會雑誌』上に「陸前國氣仙郡ノ石器時代遺跡」と題した小論を寄稿し、門前貝塚を紹介したことに始まる。追って1898年7～8月、八木契三郎氏(当時東京帝国大学理科大学人類学教室所属:1866—1942年)が鳥羽氏等の案内で、岩手県内の遺跡を踏査した。特に気仙郡内では、門前・瀬沢貝塚等の小発掘を試み、骨角器等の資料を採集し、同誌上で紹介しており(八木1899)、鳥羽氏も同誌上で両貝塚の土器と石器を報告している(鳥羽1900)。こうした経緯から当該地域は衆目を集めるところとなり、1909年には漁業史の研究で著名な岸上鎌吉氏(当時東京帝国大学農科大学水産学科教授:1867—1929年)が来訪し、細浦上ノ山貝塚ほそうらうえのやまの発掘調査を実施している。

大正期の1910年代に入ると、当該地域の貝塚研究は一層活況を呈するようになった。1917年松本彦七郎氏(当時東北帝国大学理科大学地質鉱物学教室講師:1887—1975年)が、広田湾の瀬沢貝塚の発掘調査を実施した。この調査では宮城県里浜貝塚・宝ヶ峯遺跡と共に分層的発掘方法が実践され、1919年に「宮戸島里浜及気仙郡瀬沢介塚の土器一附。特に土器紋様論一」として成果が公表されている。同氏によって確立された層位学的方法と縄文土器の型式学的研究(土器紋様論)が、山内氏の縄文土器研究に多大な影響を与えたことは山内氏自身も度々言及しており、万人の知るところである。

また1919年4～5月、長谷部言人氏(当時東北帝国大学医学部解剖学教室助教授:1882—1969年)が鳥羽氏の斡旋により、細浦上ノ山貝塚の発掘調査を実施した。石組み施設を伴った男性の屈葬人骨を検出し、後年の大洞貝塚調査の端緒を開くこととなった。なおこの調査の出土土器は、現在京都大学総合博物館に保管されており、後期前半の土器(門前式～宝ヶ峯2式)を確認することができる(横山・佐原1960)。翌年の1920年

にも同氏は瀬沢貝塚と門前貝塚の発掘調査を実施したが、同様に出土土器は京都大学に収蔵されている³⁾。

(2) 史蹟名勝天然記念物保存法 (1919年) 施行以降の状況

1919年6月に史蹟名勝天然記念物保存法が施行され、記念物保護の取り組みが開始された。岩手県でも翌1920年史蹟名勝記念物調査会が組織され、1922年同委員に任命された小田島祿郎氏⁴⁾が、翌1923年気仙郡広畑尋常小学校校長として赴任し、気仙郡の調査を担当することになり、当該地域の貝塚研究は新たな局面を迎えることになった。

1924年8月、内務省史蹟名勝天然記念物調査會考査員の柴田常恵氏(1877—1954年)が来訪し、小田島氏は前述の鳥羽氏と共に、気仙郡内の遺跡を案内した。柴田氏の来訪の目的は、史蹟名勝天然記念物保存法に基づく指定史跡のノミネートにあり、一行は門前貝塚・瀬沢貝塚・長部おさべ(二日市)貝塚・鬼沢貝塚・細浦上ノ山貝塚・下船渡貝塚・長谷堂貝塚・舞良(大洞)貝塚・蛸ノ浦貝塚・中沢浜貝塚の10貝塚と、女神洞穴・蛇王洞穴・関谷洞穴の3洞穴の計13遺跡を8日間の行程で巡回し、小発掘を試みた。その後宮古方面に足を運んだが、この調査によって、翌1925年に中沢浜貝塚・蛸ノ浦貝塚・下船渡貝塚の3貝塚と、関谷洞穴が国指定を前提とした県の仮指定を受け、更に9年後の1934年1月22日付けで上記の3貝塚が国史跡に指定された。

この巡見を契機として、舞良(大洞)貝塚が考古学関係者に周知されるようになった。当時同貝塚は小田島氏をして、「赤崎村には不思議にも二箇所貝塚(大洞貝塚と蛸ノ浦貝塚:筆者註)が荒らされずに残って居た」と言わしめる程、良好な遺存状態にあり、同氏は柴田氏に対しその重要性を指摘していた。しかし柴田氏から好感触は得られず、上記のように翌年の仮指定から大洞貝塚は除外された。

1924年の暮れに、小田島氏は東北帝国大学医学部解剖学教室に長谷部氏を訪ね、大洞貝塚に人骨が埋存する可能性を述べ、細浦上ノ山貝塚と共に発掘調査の計画を相談し、協力を要請した。長谷部氏はこの要請に対し、同年秋(8月28日付けで委嘱)に副手として着任した山内清男氏(当時22歳)を派遣し、試掘調査に当たらせることにした。学史に名高い1925年の山内・長谷部両氏による発掘調査は、上記した経過を経て同年4月(第

1次調査)と8月(第2次調査)の2回にわたって実施された。

4 第1期の調査(1925年の東北帝国大学主体の発掘調査)

(1) 第1次調査とその後の経過

1925年4月の第1次調査は、前記したように小田島氏からの要請によるもので、県当局の承認を受けて、同氏と山内氏が調査に当たった。4月11(土)～24日(金)の期間(中村編1996)で、大洞貝塚と細浦上ノ山貝塚の発掘調査が実施されたが、大洞貝塚はA'地点とC地点が調査された。長谷部氏の報告(長谷部1925b)によると、細浦上ノ山貝塚で人骨3体を得た後、4月18日(土)に大洞貝塚に至り、A'地点の発掘を試み、午後C地点へ転じ、翌日人骨の発見に至ったとのことである。

A'地点の調査区はママよりも十間程度下手に開設されたと記されており、貝層の主体からは離れた地点に相当した。長谷部氏は、「山内君の採集せる土器破片は、大洞C式及び細浦土器に類するもの、更に厚手なるもの等混入」と報告しており、第2次調査のA'地点の土器とは異なる内容であったと推察される。またC地点はママに近接した三坪(約10㎡)の区画(イ区)が調査され、「中貝層下」で人骨4体が発見され⁵⁾、8月の第2次調査はこの調査区を拡張する形で実施された(図6)。

上記の成果を踏まえて、長谷部氏は他の地点を含むより徹底した調査を希求した。折しも東京帝国大学理学部人類学教室(小金井良精名誉教授・松村瞭助教授)を中心に気仙郡石器時代遺跡(貝塚・洞穴遺跡)の調査が企画され、その一環として大洞貝塚の再調査が盛り込まれることとなった。しかし岩手県当局は長谷部氏に対し、気仙郡内の洞穴・貝塚について許可しない旨を連絡した。その理由は、仮指定から除外された細浦上ノ山貝塚と大洞貝塚で人骨が発見されたことを踏まえ、同年7月27日付けで岩手県内務部長が管内の気仙郡長と盛警察署長宛に発した発掘規制の通達に基づくものであった。そこで長谷部氏は内務省の柴田氏等を通して県当局と折衝した結果、女神洞穴・長部(二日市)貝塚・大洞貝塚の3遺跡を調査することで、懸案は決着をみた。

調査の許認可を巡り混迷したが、調査旅行の準備が整い、8月18日(火)の夜行列車で小金井良精(1859-1944年)・大山柏(1889-1969年)・八幡一郎(1902-1987年)・池上啓介(1905-1977年)の四氏が上野駅を発ち、翌日仙台駅で長谷部氏が同車した。一行は一ノ関駅にて下車し、小田島氏が合流して案内役を務めた。8月20・21日に女神洞穴、8月21～26日に長部(二日市)貝塚の踏査・小発掘を経て、大洞貝塚に至るが、長谷部氏は8月23日(日)に大洞貝塚発掘のため一行から離脱した⁶⁾。

(2) 第2次調査の概要

大洞貝塚の第2次調査は8月23日(日)～9月1日(火)までの10日間で、C地点(8月23～26日)→B地点(8月27～30日)→A'地点(8月31日)→A'地点(9月1日?)の順で実施され、8月27・28日のB地点(イ区)の調査には、長部(二日市)貝塚の調査を終えた小金井・大山・八幡・池上氏が合流した。4月の第1次調査を担当した山内氏は第2次調査に参加しておらず、山内氏と長谷部氏が同貝塚の現地調査で相まみえる機会はなかったことになる。なお山内氏は第1次調査直後の同年5月、長谷部氏の命により青森県北津軽郡相内村の笹畑貝塚とオセドウ貝塚の発掘調査を実施したが、8月下旬の第2次調査期間中の動静は定かでない。

A. C地点の調査(第2次調査)

C地点は南斜面に立地し、長谷部氏は「大洞南貝塚」と併称している。4月の山内氏の調査では一区画約三坪の範囲が発掘され、「中貝層下」から4体の人骨が検出されたが、第2次調査では山内調査区を「イ区」と称し、これを中心に約2.5m西方に4m四方の「ロ区」、更に「イ区」に連続させて「ハ区」とし、「イ区」の東に約2m四方の「ニ区」が設定され、8月23(日)～26日(水)の4日間で調査された(図6)。第1次調査を含めると、崖線に沿って東西約10m、南北2～4mの範囲が調査されたことになる。

ママに接して地盤が露出し、北から南に向かって急傾斜しており、調査では貝層が3枚確認された。「上貝層」はロ区で鉄滓が出土し、攪乱が広く及んでいたが、中貝層以下は安定した堆積となっており、南側では湧水が顕著にみられた⁷⁾。C地点の第2次調査では骨角器が約

200 点出土し、内反りの石剣の破片が特記されていたが、新出の人骨について特段の言及がなかったことから、検出されなかったと推測される。

C 地点出土の土器について長谷部氏は、「大洞 C 式土器」と命名した。数片を除いて同一類に属し、精粗の二様が存在し、「口縁の稜形突起（或は帆状、瓣状などいふも可なり）著しく退縮し、又口縁に近く、数條の横直線を陰刻し、此線上に、串にて衝きたる如き痕を連ねたるもの多きは、注意すべきで特徴ある」と記している。横直線上の「串にて衝きたる如き痕を連ねたるもの」とは、山内氏の「二溝間の截痕」または「溝底の刺痕」と判断され、前者は「大洞 C 舊型式」、後者は「大洞 C 新型式」の特徴となる。「口縁の稜形突起（或は帆状、瓣状などいふも可なり）著しく退縮」からは、後期薄手式に盛行した装飾突起からの変遷観が読み取れる。

B. B 地点の調査（第 2 次調査）

B 地点は北斜面の東側に形成され、長谷部氏は「大洞東貝塚」と併称している。調査区は先ず貝層の薄い西側の緩傾斜面に 4 m 四方の「イ区」が設定され、更に北東側に拡張するように「ロ区」が設けられた（図 6）。調査は 8 月 27・28 日に「イ区」、29・30 日に「ロ区」が実施され、「イ区」の調査には前記したように小金井・大山・八幡・池上氏が参加した（大山・八幡 1925）。貝層は傾斜に沿って北東に厚く堆積しており、上手のイ区南端は黒色土の貝層をみるのみであったが、ロ区の北東側では 6 枚の貝層が確認された。

4 日間の調査で、成人屈葬人骨 4 体、小児骨 2 体、嬰兒埋葬の土器棺 4 基が検出され、人骨が多数だったため、報告に割かれた量が 4 地点の中で最大となっている。イ区の人骨（計 5 体）の周囲から出土した土器は「蓋く細浦土器に類し」ており、「大洞 C 式文化層」に属しないとされている。また B 地点では、アカガイ製貝輪 5 点が出土したが、C 地点に比べ骨角器・石器の出土点数がやや少ないと報告されている。

B 地点出土の土器については、「(前略) 区域 (イ) の土器は滑澤薄手なるものもあるが大洞 C 式とは異り又口縁に稜形突起の著大なるや、柄形突起を有するものをも交へ、全配合が山内君の細浦貝塚上層より採集せる土器に酷似してゐる。」と述べ、「ロ区」では上層で「大洞 C 式」と思われる破片、下層から「細浦貝塚に類」する土

器と、上下異なる文化層の堆積が指摘された。細浦上ノ山貝塚は縄文時代中・後期主体の貝塚で、4 月に大洞貝塚とともに山内・小田島両氏によって調査されたが、「細浦貝塚上層」の土器は突起の特徴から、後期薄手式の土器（宝ヶ峯式）を指示したものと考えられる。しかし「滑澤薄手なるもの」には、山内氏の大洞 B 式に相当する土器も含まれていたと推定される⁸⁾。

なお B 地点ロ区の第 8 号人骨の東側から、大洞 BC2～C1 古式に比定される略完形の香炉形土器が出土している⁹⁾。また土器棺として用いられた深鉢形土器については、「大洞 C 式に殆ど見るべからざる形式を具へてゐる」と記され、体部から口縁部にかけて屈折せず立ち上がる器形の粗製土器が図示されている。

C. A 地点の調査（第 2 次調査）

A 地点は北斜面の西側に形成され、長谷部氏は A' 地点とともに「大洞西貝塚」と併称している。A' 地点と同一貝塚と見なされるが、比高差 2 m のママで境されており、その上段側（南側）が該当する（図 6）。貝殻の散布の範囲は「二畝位」（約 200 m²）で、地形は北東にやや傾斜し、東方ほど貝層が厚く堆積する。調査区はその西端に 4 m 四方で設けられ、8 月 31 日（月）に実施された。調査区内の貝殻は少なく、調査区を縮小して貝層の厚い東壁に近い部分のみを掘り下げた。表土下 15 cm で貝層に達し、更に 10 cm 下げると土器棺 2 基を検出して調査を終了し、ママ直下の接続地（A' 地点）に調査箇所を移した。

A 地点出土の土器について長谷部氏は、「A 地点の土器は略 B 地点イ区と同様な状況である」と記している。B 地点（イ区）では前述のように細浦貝塚に類する土器が出土しており、宝ヶ峯式～大洞 B 式の土器が相当すると考えられる。現在東京大学総合博物館には、「大洞 A 一号人骨」と「大洞 A 第二号人骨」と注記された深鉢形土器が収蔵されており、長谷部氏が報告した「第一及び第二號骨甕」に該当する。前者は口縁部が外折し肩が張った土器棺で大洞 A 式、後者は口縁部に 3 条の細い沈線を巡らせ屈折しない中型の土器棺で大洞 BC～C1 式頃に位置づけられる。「兩個の間隔は僅かに十糎」であったと報告されているが、同時期とは見なし難い。長谷部氏の調査区に近接した 1958 年の早稲田大学の A・B トレンチでは、後述のように大洞 A 式の纏まった土器群が

確認されており、長谷部氏の調査でも当該土器が出土していたと推定される。

D. A' 地点の調査 (第2次調査)

第2次調査のA' 地点の調査区はママの直下で、A 地点調査区に僅かに間隔を置いて並んで設定された。A' 地点の貝殻の散布区域は広く、地形は北東に傾斜し、東方ほど貝層が厚く堆積している。第2次調査の調査区はその西端で、A 地点と同様に殆ど貝がなく、「黒褐色の土」に混じって夥しい量の土器が出土した。しかし人骨は検出されず、調査は日程の都合上9月1日(火)に終了し、後日改めて続行する旨が記された。発掘区域の規模は明記されていないが、図面上から4m四方のA 地点よりも狭い範囲であったことが窺える。

A' 地点出土の土器については、「此A 発掘地点の土器はすべて光澤ある暗褐色を呈し、大洞C 式にして稜形突起尚著しく、口縁下に数條の横匱線を陰刻せるは彼に似て、而も刺痕を加えざるを異りとし、所謂亀ヶ岡式或は奥羽薄手式中明に區別し得べき一型をなすものである。A' 地点にて山内君の採集せる土器破片は大洞C 式及細浦土器に類するもの、更に厚手なるもの等混入し、又今ママの直上にて採集せるはB 地点土器に類すること上記の如くなるに此特殊なる形式の殆ど純集積をなせるに遭遇せるは興味深きことである。即ち此種の土器のみを出す代表的遺跡を明らかにするまで、假に之を大洞A 式土器と名けて區別したいと思ふ。」として、「大洞A 式土器」を解説した。

「A 発掘地点の土器」は、光沢のある暗褐色を呈し、大洞C 式に似てA 突起が発達し、口縁直下に横線が巡らされるが、溝底の刺痕が加えられない特徴が示されており、山内氏の大洞A' 式に相当する内容と考えられる。ママ直上のA 地点ではB 地点イ区即ち細浦貝塚に類する土器が出土しており、上記した長谷部氏の「A 発掘地点の土器」はA' 地点の土器の誤りで、命名された型式名も「大洞A' 式土器」が正式であったと推定される。この点を勘案すると、長谷部氏が「この貝塚の土器について豫報を發せられ、所謂亀ヶ岡式という名稱は公明なものではなく、大洞C 式、同A' 式等の細別あることを指摘せられた」とした山内氏の1930年論文の記述と矛盾しない。なおA' 地点出土土器の「稜形突起」は、山内氏のA 突起即ち「三角^{とう}壙状(三角柱状: 筆者註)の一例

面に於て口端に縦に附着する(A 突起)」(山内1930)を指示しており、B 地点で指摘された同突起(後期)とは別種となろう。

長谷部氏の調査区はママ直下で、大洞A' 式土器が纏まって出土した。しかしA' 地点は面積が大きく、約20m下手に位置する4月の山内氏の調査区が示すように、包含土器は多種多様となっている。大洞A' 式土器は1956年の慶応義塾大学の調査でも、西端で局所的であったことが確認されている。

(3) 第2次調査以降の経過

1925年の大洞貝塚の調査直後の10月、長谷部氏は調査の速報を『人類学雑誌』上に掲載し(長谷部1925b)、同月24日(土)に開催された人類学会例会の席上でも「大洞貝塚発掘所見」を演説した¹⁰⁾。また翌25日(日)には、日本人類学会が主催した千葉県犢橋貝塚の遠足會に長谷部・山内両氏が参加し、大洞貝塚で実践した4m四方トレンチの層位的発掘を披露し、その能率性に周囲を驚嘆させている(中谷ほか1925: 467頁)。

翌年の1926年4月には、長谷部・山内両氏が青森県是川中居(一王寺)貝塚の発掘調査を4地点(A・A'・B・C 地点)で実施し、円筒式土器の分層的成果を得ており、続く5月31日(月)~6月12日(土)に山内氏は北海道室蘭市の本輪西貝塚の調査へ遠征し、続縄文文化研究の端緒を開いた。山内氏が東北帝国大学に着任した直後は、大学主体の組織的調査が立て続きに実施される状況にあった。

東北地方において組織的調査を主導した長谷部氏は、それまでの貝塚研究に区切りを付けるべく、その集大成となる『先史学研究』を1927年10月に上梓した(長谷部1927b)。同氏は1927~1929年に当時日本の委任統治領であったミクロネシアの人類学調査に従事し、研究活動の主体をシフトさせていった。また1933年7月15日~1935年7月15日の2年間は東北帝国大学第10代医学部長の要職を歴任しており、結果的に東北地方の遺跡調査から距離を取ることになった。

山内氏は長谷部医学部長在任中の1934年2月28日付けで、約10年間にわたる東北帝国大学副手の職務を32歳で辞している。長谷部氏の海外調査が本格化した1927年以降の発掘調査は、休日に小規模で実施される

ことが多くなり、1927～1929年に実施された宮城県内の大木冨貝塚・槻木貝塚・川下り(響)貝塚・船入島貝塚等の発掘には、当時第二高等学校(旧制)の学生であった伊東信雄氏(1908-1987年)や斎藤忠氏(1908-2013年)、宮城県立仙台第一中学校(旧制)に在学中の角田文衛氏(1913-2008年)の協力を得ていた。激変した厳しい研究環境の中であって、弱冠28歳で1930年の記念碑的論文「所謂龜ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」が発表され、前後して「関東北に於ける繊維土器」(1929～1930年)や「日本遠古之文化」(1932～1933年)等の重要論文が矢継ぎ早に公表されており、また1931年頃に縄紋の施文法が解明されている。30歳前後に当たる在仙時代が、日本考古学研究のエポックを画したと言っても過言ではないであろう。

長谷部氏は1936年5月に55歳で急逝した村松瞭氏(1880-1936年)の後任として、1938年1月東京帝国大学理学部人類学教授を発令され、翌年4月の人類学科創設に伴い初代の主任教授に就任し、1943年3月同大学で定年を迎えている。同氏の東北帝国大学から東京帝国大学への転出に伴い、大洞貝塚の出土品が東京帝国大学に移管され、現在東京大学総合博物館に収蔵されているが、資料の一部は東北大学に残されたままとされている。

(4) 小 結

1925年の大洞貝塚の調査は、4月に山内氏等によってC地点とA'地点、8月に長谷部氏等によってC・B・A・A'地点が実施され、後者の調査期間はB・C地点が4日間、A・A'地点が各1日であった。2回の調査を合わせると、埋葬人骨がC地点で4体、B地点で6体、土器棺がB地点で4基、A地点で2基検出され、C地点では豊富な骨角器類の出土、B地点では人骨・土器棺の検出、A'地点では夥しい量の土器の集積が特記された。

長谷部氏の報文では、土器は大きく三分された。即ち「細浦土器に類するもの」「大洞C式土器」「大洞A'式土器」である。地点別でみると、C地点では「大洞C式土器」、B地点では上層で「大洞C式土器」、下層で「細浦土器に類するもの」、A地点では「細浦土器に類するもの」、A'地点では「大洞A'式土器」、同地点の山内調査区からは「大洞C式土器」「細浦貝塚土器」「厚手なるもの」等が出土した。

山内氏はこれらの資料を精査し、更に是川中居遺跡(青森県)と藤株遺跡(秋田県)の土器を吟味することで、発掘調査から5年後に6型式に区分した成果を公表した(山内1930)。発掘地点毎の土器内容の相違、B地点における層序関係、そして土器の系統的变化に基づく型式学的研究から、各型式がそれぞれ年代を異にするという結論を導き出した。このような視点は、1924年3～4月の加曾利貝塚(千葉県)、同年5・9月の新地・三貫地貝塚(福島県)の分層発掘の試みを経て、翌年の大洞貝塚の調査に結実し、以降の調査でも実践されていった。

5 第II期の調査(1956～1960年の早稲田・慶応大学の発掘調査)

1952年の慶応義塾大学の清水貝塚^{しず}の調査を皮切りに、1961年の同大学の下船渡貝塚の調査まで、大船渡湾周辺の貝塚調査が西村正衛氏(1915年-1995年)を中心とした早稲田大学と江坂輝彌氏(1919-2015年)を中心とした慶応義塾大学によって、9回実施されてきた(表1)。約10年間毎年のように一方の大学が来訪し、それぞれ4箇所の貝塚を調査したが、大洞貝塚は慶応義塾大学が1956年と1960年の2回、早稲田大学が1958年の1回、合計で3回の発掘調査が実施されている。

大船渡湾貝塚群の調査は、早稲田大学が大船渡湾と利根川下流域の貝塚の立地・形成についての比較や縄文時代前期末～中期にかけての土器型式編年、慶応義塾大学が骨角器の変遷と晩期土器の型式編年に研究の主眼を置いていた。両大学の調査には、常に地元の研究者である東登氏(県立盛高校教諭:1925-1967年)と吉田義昭氏(盛岡市公民館職員:1931-)が協力しており、大学による調査が終了してからも、当該域の貝塚調査は両氏により精力的に進められてきた。

(1) 1935年と1951年の小規模調査

1925年の長谷部氏等による学史的調査と、1956～1960年の早稲田・慶応両大学による組織的調査の間に約30年の歳月が介しているが、その間にも大洞貝塚の小規模調査が、少なくとも2回実施されている。

長谷部氏等の調査から10年後の1935年9月初旬、当時京都帝国大学文学部史学科2回生(当時22歳)の角田文衛氏が、A地点とB地点を発掘し、人骨を検出し

表1 早稲田・慶応大学による大船渡湾周辺貝塚の調査歴

調査年月	貝塚名	調査大学	調査参加者
1952年 7月	清水貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・東登 ほか
1954年 7月	門前貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・東登・吉田義昭 ほか
1955年 8月	清水貝塚	早稲田大学	西村正衛・直良信夫・菊池義次・金子浩昌・杉山莊平・東登 ほか
1955年 11月	長谷堂貝塚	早稲田大学	西村正衛・菊池義次・金子浩昌 ほか
1956年 4月	大洞貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・可兒弘明・東登・吉田義昭 ほか
1957年 8月	蛸ノ浦貝塚	早稲田大学	西村正衛・滝口宏・菊池義次・金子浩昌・和田哲・東登・鈴木尚 ほか
1958年 10月	大洞貝塚	早稲田大学	西村正衛・金子浩昌・中村恵次・和田哲 ほか
1960年 8～9月	大洞貝塚	慶応義塾大学	清水潤三・江坂輝彌・笹津備洋・近森正・鈴木公雄・渡辺誠・赤澤威 ほか
1961年 7～8月	下船渡貝塚	慶応義塾大学	江坂輝彌・草間俊一・笹津備洋・渡辺誠・東登・吉田義昭 ほか

たが、詳細は明らかでない。同年12月に公表された論文「陸奥における二、三の薄手式土器」の中で、窓枠状の磨消文様を持つ十腰内1式系の土器（南境2～宝ヶ峯1式）の拓影図が、「気仙郡大洞貝塚B地点出土」として掲載されていた（角田1935）。出土地点が明記されたことから、この調査で採集された可能性が高く、同貝塚出土の土器片は現在名古屋大学総合博物館に角田コレクションとして保管されている（筆者未確認）。

1940年5月には、大山柏・清水潤三（1917－1988年）・竹下次作氏（1909－2000年）等の大山史前学研究所と慶応義塾大学のグループが、大洞貝塚の東方5kmに位置する宮野貝塚（推定A・D地点）の発掘調査を実施し、人骨4体を検出した。大山氏は1925年8月の大洞貝塚B地点の調査に参加しており、一行が盛一綾里間を陸路で移動したとすれば、途中大洞貝塚に立ち寄った可能性が考えられる。当時24歳で慶応義塾普通部（旧制）の教職に就いていた清水氏が同行していた点を勘案すると、後年の慶応義塾大学による大船渡湾貝塚群の調査（1952～1961年）の端緒を開いたとみることができるであろう。

終戦から6年が経過した1951年6月、東登氏と菊池啓治郎氏（1924－2015年）が、大洞貝塚のA地点とA'地点の境界の斜面部に、東西1.2m×南北3mのトレンチを開設した。詳細は明らかでないが、大洞BC式を含む貝層から骨角器・石器・獣骨・魚骨等が出土したことが紹介されている（大船渡市教委2000：18－19頁）。菊池氏が提供した写真からは、1925年調査区の東寄りのママ（斜面部）の地点を発掘したことが確認できる。

（2）1956年の慶応義塾大学による調査

慶応義塾大学文学部考古学研究室による大洞貝塚の1回目の調査は、1956年4月7日（土）～14日（土）の8日間（2日降雨のため休止）で、江坂輝彌氏（当時文学部助手）を調査責任者としてA'地点とA地点で実施された（江坂1961）。亀ヶ岡式土器に伴う骨角器、特に漁撈具の年代の変遷の把握を調査目的に掲げ、A'地点には崖線に沿って南東から北西へ長さ14m、幅2mの第1トレンチ、A地点には2m四方の第2トレンチが設定された（図6）。

A'地点の第1トレンチでは、貝層下に後期末の包含層が形成され、その上に東側から西方に向かって新しい文化層の堆積が認められた。調査区東側では大洞B・BC式の貝層が見られ、トレンチ中央部より大洞C1式更に同C2式の貝層が形成され、トレンチ西端では同C2式の貝層の上に同A'式を包含する黒色土層が観察された。トレンチの両端はそれぞれ南北に拡張され、合計すると約50㎡の面積が調査された。第1トレンチでは大洞B式と同C1式の良好な資料が出土し、トレンチ中央の4区では埋葬された犬骨が検出された。

A地点の第2トレンチは、第1トレンチ東側の延長としてA地点の東寄りに開設された。トレンチ自体は2m四方と小規模で、大洞B式と後期末の2枚の貝層を検出した。

1956年の調査では、後期末から大洞B・BC・C1・C2式に伴う釣針や銚等の骨角器類の変遷の把握することができたと報告されている。その概要は調査直後に立正大学で開催された日本考古学協会第17回総

会(1956年5月6日)で、江坂氏により「岩手県大船渡市赤崎町大洞貝塚の調査」の表題で口頭発表され、また同年6月に刊行された『大洞貝塚』(大船渡市教育委員会社教シリーズ第七集)の中でも紹介されている¹¹⁾。しかし出土土器について具体的な提示はなく、後年岩手県立博物館から発刊された『岩手の土器—県内出土資料の集成—』(小田野ほか1982)の中で、大洞C1式の浅鉢・注口土器等の3点の土器が図示されたに過ぎない。

A'地点の調査はこれ以降実施されていないが、貝層が長期にわたって形成されていた様相が確認された。同地点の後期末の貝層は明らかでないが、大洞B2式以降東側から西方へ漸次形成されていた。長谷部氏は山内氏のA'地点の調査区を「大洞C式及細浦土器に類するもの、更に厚手なるもの等混入し」、多種多様な土器を包含していると紹介したが、1956年の調査でも「厚手なるもの」を除いて、この記述を追認する結果となった。またこの調査で大洞A'式が長谷部氏の調査区に近接した西側で局所的に出土したことから、トレンチ西端の黒色土層が長谷部調査区の「黒褐色の土」に連続すると推定される。

なお調査期間中の3日間、吉田義昭氏と東登氏等が参加し、A'地点出土品の多くが当時吉田氏が勤務していた盛岡市公民館にも収蔵されている。2015年に公表された『大船渡市大洞貝塚 昭和31年発掘調査出土図録(盛岡市遺跡の学び館所蔵資料)』の中で、縄文時代後期後葉～弥生時代前期までの土器が連続と出土していたことが確認できる(盛岡市遺跡の学び館2015)。

(3) 1958年の早稲田大学による調査

早稲田大学考古学研究室による調査は、1958年10月15日(水)～22日(水)の8日間で、西村正衛氏(当時教育学部助教授)を調査責任者としてA地点のみで実施された(西村1962)。A地点にはA～Dの4本のトレンチが開設され、合計で約20㎡の面積が調査された(図6)。また貝塚全体の測量図が作成されている¹²⁾。

A. A・Bトレンチの成果

AトレンチはA地点の西側に、南西から北東方向に幅1.5m・長さ3mで設定された。貝層は北東方に傾斜し、上層より表土→混貝土層→混土貝層→純貝層→混貝土層→混土貝層→褐色土層の堆積が認められた。BトレンチはAトレンチの東側1.5mに平行して同規模に設置され

た。堆積状況もAトレンチ同様複雑な様相を示していた。Aトレンチは1925年のA地点調査区に最も近接しており、2001年の大船渡市教育委員会による調査で位置が特定されている(大船渡市教委2004)。

A・Bトレンチからは大洞A式の良好な資料が出土した。西村氏はこれらの土器を以下のように分類している。

第Ⅰ類：大洞A式の精製土器

- a種—工字文を施した土器
- b種—2本の平行線を主体とした土器
- c種—縄文と篋書き沈線文
- d種—無文土器

第Ⅱ類：大洞A式の粗製土器

- a種—縄文の土器
- b種—口辺に太い平行沈線文と胴部に縄文を施した土器
- c種—その他

B. C・Dトレンチの成果

CトレンチはBトレンチの北東方約12mに、崖線に沿うように東西4m・幅1.5mで開設された。貝層はやはり北東方に傾斜し、全体的に土の多い混貝土層が堆積しており、その中心部に混土貝層が認められ、後期末から晩期初頭にわたる遺物が出土した。DトレンチはCトレンチの北東約3mの地点に、東西2m、幅1.5mで開設され、貝層は純貝層と混土貝層が交互に、北東に傾斜して堆積していた。遺物の出土状況はCトレンチと同様であるが、大洞B式が多く出土しており、西村氏はC・Dトレンチの土器を以下のように分類している。

第Ⅰ類：磨消縄文に竹管列を加えた土器。Cトレンチ最下層で検出。

第Ⅱ類：小瘤を器面に点々と配した土器。Cトレンチでは中部混貝土層から最下層、Dトレンチでは最下の黒色土層と粘土層より検出。

第Ⅲ類：沈線と刻目文による文様構成の土器。Cトレンチの中部混貝土層において最も多く検出。

第Ⅳ類：磨消縄文の土器。本土器も中部混貝土層に多く検出。更にa・b・cの3種に細分。

第Ⅴ類：縄文の土器。両トレンチで多く検出。

第Ⅵ類：無文土器。Cトレンチで多く検出。

第Ⅶ類：櫛歯文土器。CトレンチのV層から少量検出。

第Ⅷ類：大洞B式として総称されるもの。Dトレンチ貝層から多く検出されたが、下部貝層出土のもの、上部貝層出土のものに分けて考えることができる。

西村氏は第Ⅰ類から第Ⅶ類までを後期末にあてる意向を示した。第Ⅰ類は十腰内Ⅱ群b類、第Ⅱ群は瘤付土器第Ⅰ・Ⅱ段階、第Ⅲ類は瘤付土器第Ⅲ段階、第Ⅳ類は瘤付土器第Ⅳ段階が該当する。これらの資料はCトレンチにおいて最下層から上層にかけて、一連の系列をもってまとめて発見され、層位的に後期末の土器が細分される見通しが指摘された。具体的な型式変遷の区分は示されなかったが、第Ⅱ類と第Ⅲ類が層位的に分離されたことは、今日的な観点に立つと妥当な分類であった。なおCトレンチの位置は、慶応義塾大学1956年調査の第2トレンチと1960年調査のA Kトレンチの間であったと推定される。

C. 小 結

早稲田大学によるA地点の調査では、貝塚の東側（瘤付土器～大洞B式）が古く、西側（大洞A式）が新しくなることが確認された。下段のA'地点でも西方に向かうに従い新しくなる傾向が1956年の慶応義塾大学の調査で指摘されており、両地点が一体の貝塚であることを裏付けている。この調査のA地点Cトレンチから出土した深鉢形土器2例は、安孫子昭二氏の著名な変遷図の中で、「大洞B1式」（安孫子1969：第1図20・23）として紹介されているが、2例とも先の西村氏の分類では第Ⅳ類に該当する。

西村氏は1974刊行の『日本考古学の現状と課題』の中で、当貝塚の地形測量図を提示し、貝塚の範囲を明確にした（西村1974：第23図）。この測量図では、遺跡南東部に新たな貝塚が示されている。小道の東側でママ直下に位置しており、西村氏の言及はないが、1960年にD地点として調査された位置に該当し、この調査において発見されたと推定される。

この大洞貝塚の発掘調査が、早稲田大学による大船渡湾周辺貝塚調査の最後を飾るものとなった。筆者は1986年頃に西村氏本人から、1960年5月24日の「チリ地震津波」の被災で当該地域の発掘調査を見合わせたと教示を受けており、それ以降利根川下流域の遺跡研究に傾注するに至ったと推定される。またこの調査の直後、

「雨滝式」設定の契機となった岩手県二戸市（当時金田一村）雨滝遺跡の第2次調査が、明治大学文学部考古学研究室（調査責任者：芹沢長介氏）によって、10月30日（木）～11月8日（土）までの10日間（『石器時代の日本』では10月31日～11月7日までの8日間）で実施されたことは特記されよう。

(4) 1960年の慶応義塾大学の調査

清水潤三氏と江坂輝彌氏を中心とした慶応義塾大学文学部考古学研究室による2回目の発掘調査は、1960年8月26日（金）～9月4日（日）の10日間で、A・B・C地点と新たに発見されたD地点で実施された（図6）。「骨角製漁撈具並びに装身具の研究と、大洞式土器の編年研究」を調査の目的として、4地点が並行して調査された（清水1965）¹³⁾。

A. A地点の調査

A地点は貝層散布範囲の中央付近で、調査区は1956年調査の第2トレンチの西側に、斜面に沿って2×6mで設定された（後に北側に1m拡張）。A Kトレンチと命名され、主に鈴木（当時町田）公雄・赤沢威氏が担当した¹⁴⁾。8月27日（土）～9月3日（土）の8日間で調査され、トレンチは2m四方を一区画とし南より1区として最終的に4区画が設定され、約14㎡の面積が調査された（4区のみ2×1m）。調査の順序はまず1区と3区が発掘され、その結果を踏まえて間の2区が掘り下げられ、更に3区の北側に4区が拡張された。

A Kトレンチの貝層は北東に向かって厚く堆積している。したがって南側の1区は貝層が薄く、表土直下に褐色土が堆積しており、遺物の量も少なかった。

3区は上層より表土→混土貝層→混貝土層→純貝層→下部褐色土層（間層）→下部混土貝層→貝層下土層の順に堆積しており、7枚の層位が確認された。混土貝層から大洞B1・B2式、純貝層から瘤付土器第Ⅲ段階～大洞B1式、下部褐色土層・下部混土貝層から瘤付土器第Ⅱ段階、貝層下土層から宝ヶ峯式が主に出土した。

2区は1・3区の結果に基づいて細かく層位が区分された。上層より表土→第1層（混土貝層）→第2層（混土貝層）→第1間層→第3層（純貝層）→第2間層→第4層（純貝層）→第5層（黄褐色粘土層）→第6層（黒色土層）の9枚の層位が確認された。第1層～第3層までが瘤付土器第Ⅲ段階～大洞B1式、第2間層・第4層

から瘤付土器第 I・II 段階、第 5 層から宝ヶ峯式、第 6 層から後期前葉の土器が主に出土した。

4 区はトレンチの拡張として傾斜下部(崖線手前)に開設された。上層より表土→上部混貝層→上部純貝層→間層(褐色粘土層)→下部純貝層→貝層下土層の順に堆積しており、間層(褐色粘土層)を挟んで上層から大洞 B2 式、下層から瘤付土器第 III 段階～大洞 B1 式が主に出土した。

A K トレンチでは、後期中葉宝ヶ峯式から晩期初頭大洞 B2 式までの連続した土器型式の変遷が、層位別に観察された。貝層は瘤付土器第 I 段階から大洞 B2 式にかけて形成され、3・4 区では 1 m 程の堆積が認められたが、特に 2・3 区では瘤付土器第 II 段階と同 III 段階が層位的に分離され、3・4 区では上部の貝層に大洞 B2 式が纏まっていた。前記したように 1958 年の早稲田大学 C トレンチでも同様の成果が確認されており、A K トレンチと早稲田大学 C トレンチは近接した位置関係にあったことが推定される(図 6)。

B. B 地点の調査

B 地点の調査区は北東斜面の傾斜に沿って 1.5 × 6 m で設定され、B K トレンチと命名された。長谷部調査区の南側に相当し、主に笹津備洋氏が担当し、9 月 2 日(金)～4 日(日)の 3 日間で調査された。1.5 m 四方を一区画とし、南西(斜面上部)を 1 区として 4 区画が設けられ、約 7 m²の面積が調査された(3 区の調査は実施されなかった)。

1・2 区では 5 枚の貝層が確認され、それぞれ北東に向かって急傾斜していた。第 1 貝層は大洞 A' 式を包含し、第 2 貝層は大洞 A 式、第 3 貝層は大洞 C2 式、間層を挟んで第 4 貝層は大洞 BC?～C2 式、最下層の第 5 貝層は大洞 B 式を包含しており、更に 2 区の第 5 貝層下の黄褐色土層から、仰臥屈葬人骨 1 体(成年男子)が検出された。また骨角器類は大洞 C2 式包含層(第 3 貝層)で多く出土した。

1925 年の調査では上層で「大洞 C 式」、下層から「細浦貝塚に類するもの」が出土し、最大 6 枚の貝層が確認されたが、1960 年の調査では 5 枚の貝層が確認され、大洞 A・A' 式の貝層が明らかになった。B 地点では大洞 B 式から晩期終末まで連続と貝層が形成されており、隣接した A・A' 地点と並存していたことになる。

C. C 地点の調査

南斜面の C 地点の調査区は、小道西縁に沿ってほぼ南北方向に 2 × 12 m で設定され、C K トレンチ(北側より 1 区として 6 区画からなり 1 区はママの直下)と命名された。後に西に東西 5 m × 南北 3 m の C E 区(C K 3・4 区からの拡張)、更に西方に 3 m 四方の C I 区(C E 区との間隔は 1 m)が追加された(図 6)。主に近森正・高山純氏が担当し、調査は 8 月 26 日(金)～9 月 3 日(土)までの 9 日間で実施され、約 48 m²の面積が調査された。

層序は表土→褐色混土貝層→黒色混土貝層→褐色土層の順に、北から南に急傾斜して堆積しており、出土土器は大洞 C1・C2 式主体で、特に同 C2 式が多く出土した。C K トレンチ西壁に攪乱と思われる貝層不良部分が確認されたことから、長谷部氏発掘区域(二区)を切ったと判断され、1925 年調査区の東側と南側を調査したと推定される。調査区の南側(C K 3 区以南)は湧水が著しく、褐色土層以下の調査は困難を極めた。貝塚の形成時期は大洞 C1・C2 式と推定され、他の型式は僅少であった。1925 年の調査では、3 枚の貝層が検出されたが、今回の調査では褐色混土貝層と黒色混土貝層の 2 枚で、層厚は最大で 1.5 m (C E 区)に達した。また上面では馬歯が出土するなど攪乱が広く及んでおり、1925 年の調査所見を追認した。

D. D 地点の調査

D 地点は 1958 年の早稲田大学の調査で、新たに発見された貝塚である¹⁵⁾。当初法面下端近くに 2 m 四方の D K トレンチが設定されたが、良好な貝層が確認されなかったため調査を打ち切り、貝殻が濃密に分布したより南側に、東西 2 m × 南北 6 m の D E トレンチ(北側より 1 区として 3 区画)を設定した。更に調査状況に応じて、D E 1・2 区の東側に D E 拡張区(1.5 × 2.2 m)→D I トレンチ(4 × 0.8 m)→D O トレンチ(4 × 1 m)の順で拡張され、最終的に約 23 m²の面積が調査された(図 6)。主に渡辺誠氏が担当し、調査は 8 月 26 日(金)～9 月 4 日(日)までの全期間にわたって実施されたが、拡張を続けたため調査区は複雑な形状を呈する。

層序は表土→貝層→混貝土層→褐色土層の順に、南東方向に傾斜して堆積しており、出土土器は貝層から瘤付土器第 I 段階～大洞 B 2 式、混貝土層から瘤付土器第 I 段階、貝層下褐色土から宝ヶ峯式が出土した。貝層は

最大層厚が70 cm程度で、後期後葉から晩期初頭にかけて形成された。貝層中からは幼児を埋葬した土器棺(DI 1区)、埋葬犬骨(DI 2区)、屈葬人骨(DO 1区)が検出され、また貝層下から炉跡遺構が検出され、その焼土中から石棒が横臥の状態出土した。大洞貝塚の中では直径6 m程度と最も規模が小さく、1960年の調査で貝層の主体は略完掘たとされている(大船渡市教委2000:156頁)。

E. 小 結

1960年の調査は、これまでになく大きな規模で実施された。A'地点を除く全ての地点が並行して発掘され、調査面積の総計は約92 m²を測り、各地点の様相がより明確なものとなった。A地点は1925年以降4回目の調査、B・C地点は1925年以降の調査、そしてD地点は初めての調査となるが、過去の調査区との位置関係はC地点で確認された。この調査では埋葬人骨がB地点1体、D地点1体の計2体、土器棺がD地点1基、埋葬犬骨がD地点で検出され、埋葬人骨2体は大洞B式以前(瘤付土器期)に位置づけられる。

慶応義塾大学の2回目の調査では、A地点で後期中葉から晩期前半にわたる土器型式の層位的推移が確認され、それと同調して骨角器類の年代的な変遷を考察する上での好資料も得られている。B地点では大洞A式と同A'式の貝層が判明した。しかしこの調査で公表された内容は乏しく、土器資料ではA地点AK 2区第3層で出土した瘤付土器第Ⅲ・Ⅳ段階の深鉢形土器2点(安孫子1969:第1図16・第8図2)、C地点CEトレンチ褐色土層上位出土の大洞C2式壺形土器(小林達雄編1989:図版781)、B地点BK 1区第2貝層下位出土の同A1式壺形土器(鈴木・林編1981:図版114、小林達雄編1989:図版822)に限られているのは遺憾にたえない。

6 第Ⅲ期の調査(大船渡市教育委員会による調査)

(1) 国史跡指定までの状況(2001年以前)

大洞貝塚は1966年3月、貝島貝塚(一関市花泉町)と共に、岩手県の史跡に指定され、現状変更の規制等の遺跡保護の対策が漸く講じられた。指定範囲はA・A'・B・D地点の一部の面積3,310 m²で、C地点は対象から除外され、遺跡全体に及ぶものではなかった。また

1970年3月には、三陸縦貫鉄道(現三陸鉄道南リアス線)の盛一綾里間が開通した。貝塚のある丘陵の北辺に陸前赤崎駅が開設され、東方の山裾に綾里トンネルが掘削されるなど周辺の景観は一変した。しかし鉄道敷設に際しての発掘調査は実施されなかった。

直近の発掘調査(1960年)から30年以上が経過した1994年、大船渡市教育委員会による行政主導の調査が開始された。「重要遺跡である大洞貝塚について、史跡指定地の範囲見直しを含めた遺跡の保護や活用の在り方を検討するため、遺跡の範囲と埋存状況など、全体的な遺跡構成にかかる基礎データを早急に集積する必要があるとの認識が、文化庁、岩手県教育委員会から示され」(大船渡市教委2000:24頁)、範囲確認調査に着手した。

1994年は遺物の散布範囲を把握するため、表面観察による遺物分布調査を広範囲で実施した。その結果、遺物の散布範囲が大洞丘陵を中心に10万m²以上の広大な範囲に及ぶことが確認され、この範囲を「遺跡確認調査の対象範囲」に設定した。同年7月の江坂輝彌氏(慶應義塾大学名誉教授)の現地指導を踏まえて、9月にC地点とその上位斜面の確認調査が実施された。

翌1995年からは、6名の委員からなる「大洞貝塚発掘調査指導委員会」(渡辺誠委員長・菊池啓治郎・須藤隆・藤沼邦彦・及川洵・熊谷常正委員)が設置され、指導・助言を仰ぎながら調査を進めることになった。同年はC地点の原堆積貝層の範囲確認と旧発掘区の探査を目的とした発掘調査が、7～8月に実施された。1996～1998年にはB地点貝層の発掘調査が実施され、併せて広範囲に及ぶ確認調査が1999年まで継続された。特に1996年の大洞丘陵鞍部の東側の調査では、土坑墓に埋葬された大洞C2式の埋葬人骨5体(男性3体・女性2体)が検出され、貝塚以外にも墓域が形成され、人骨の遺存することが明白になった(図6)。

B地点では2×2 m(96B1区)の調査区が貝塚の東側に設定され、厚さ1 m程の堆積層(1層～369層)が3ヶ年にわたり悉皆調査された。6層～365層が安定した貝層で、366層以下が貝層下土層となり、貝層出土の土器は上位から、上層土器群(大洞C1式)→中層土器群(大洞C1式古段階)→下層土器群(大洞B2式)に区分され、最下層の368層からは瘤付土器が出土した。

上記した確認調査の成果は、2000 年 3 月に総括報告書として公表された (大船渡市教委 2000)。遺跡範囲約 70,000 m²のうち重要区域約 20,000 m²が区分され (図 5)、その成果をもとに大船渡市は 2001 年 1 月、重要区域の国史跡の指定を文部科学大臣に申請した。同年 5 月の文化審議会文化財分科会の答申を経て、同年 8 月 13 日の官報告示をもって国史跡に指定されたが、1924 年以來の小田島祿郎氏の悲願がようやく成就したことになる。

指定面積は 20,434 m²で、「東北部、三陸海岸中央にある大船渡湾の湾奥部に所在する縄文時代晩期の貝塚。本遺跡の調査成果を基準に東北地方から北海道南部に分布する縄文時代晩期の土器型式が設定された標識遺跡として学史上著名。また貝塚全体は良好に保存され、優れた骨角器や多くの食料残滓は、この地域の漁労の実態や生活の内容をよく示し、大船渡湾貝塚群を代表する遺跡として重要である」ことが、指定理由に上げられた (大船渡市教委 2002)。

(2) 国史跡指定以降の状況 (2001 年以降)

2001 年国史跡に指定されてからも、史跡整備に向けての基礎データの集積を図るため、大船渡市教育委員会による確認調査が継続された。なお大洞貝塚発掘調査指導委員会は、2001 年度から「大船渡市史跡等保存整備検討委員会」(渡辺誠委員長ほか委員 6 名)に発展的に改組された。

A 地点では貝層の形成プロセスの解明を目的として、2001 年から 3 ケ年かけて、貝塚西端の 1.1 × 2 m の範囲が、東北大学文学部考古学研究室の協力で悉皆調査された。「A 地点貝層精査区」と呼称され、最上部の 1 層から最下層の 117 層まで 117 枚の層位が精査され、深さは 1.5 m に達した。その内訳は純貝層 15 枚、混土貝層 72 枚、混貝土層 28 枚、土層 2 枚で、層厚 5 ~ 13 cm の 107 層 (混貝土層) を挟んで上層が大洞 A1 式、下層が瘤付土器第 I 段階を主体とした貝層で、土層 2 枚は最下部の 116・117 層 (黒褐色土層) で宝ヶ峯 2 式が出土した。大洞 A 式期は純貝層、混土貝層が細かな単位で連続して堆積する一方、瘤付土器期は貝殻を僅かに含む層厚 5 ~ 10 cm の黄褐色と黒褐色の混貝土層が交互に堆積しており、貝層の堆積状況に差異が認められた (大船渡市教委 2004)。なおこの調査区で攪乱部分が確認され、1958

年の早稲田大学 A トレンチと特定されている。

C 地点では道路東側で、2000 年に個人住宅の建て替えに伴う発掘調査が実施された。東側に広がる混貝土層は西方の貝層の流れ込みで、貝層の東縁辺に相当することが確認された (大船渡市教委 2002)。

2011 年 3 月の東日本大震災では、遺跡範囲の西端の低地まで津波が到達したが、丘陵区域に被害は及ばなかった。震災後は丘陵先端部付近が防災集団移転地となり、対象区域では試掘調査が実施されたが、遺構・遺物は確認されなかった。遺跡周囲は道路が整備され、宅地化が進んでおり、指定区域外では住宅建設に伴う発掘調査も実施されている (大船渡市教委 2016)。航空写真から見た現況は、1996 年 3 月の時点で作成された測量図 (図 5) から変貌を遂げている。

7 地点毎調査歴の総括

大洞貝塚は 5 つの地点から構成される。但し A・A' 地点は連続した一体の貝塚と考えられるため、正確には 4 地点となる。以下では、地点毎に調査歴を総括する (表 2)。

A 地点は、1925 年 8 月の第 2 次調査、1935 年 9 月の角田文衛氏の調査、1956 年 4 月の慶応義塾大学 (第 2 トレンチ)、1958 年 10 月の早稲田大学 (A ~ D トレンチ)、1960 年 8 ~ 9 月の慶応義塾大学 (A K トレンチ) の 5 回の調査が実施されており、その他に 2001 ~ 2003 年大船渡市教育委員会により大洞 A 式の貝層が精査されている (A 地点貝層精査区)。大洞 A 式の標式地点であるが、同式は貝層散布範囲の西側に集中しており、1925 年の第 2 次調査区と 1958 年の A・B トレンチ、2001 年の A 地点貝層精査区で出土している。

A' 地点は、1925 年 4 月の第 1 次調査、同年 8 月の第 2 次調査、1956 年 4 月の慶応義塾大学 (第 1 トレンチ) の 3 回の調査が実施されており、それ以降の調査は確認できない。A 地点との境界となるママ (斜面部) では、1951 年 6 月に東登氏等によって小規模調査 (東西 1.2 × 南北 3 m) が実施されている。大洞 A' 式の標式地点であるが、同式は貝層散布範囲の西側に集中しており、1925 年の第 2 次調査の出土土器が指標となる。同式の貝層は確認されておらず、黒色 ~ 黒褐色土層から纏まって出土している。

表2 大洞貝塚の調査歴一覧

調査年月	調査地点	調査主体	調査参加者	文献
1925年 4月	A'・C地点	東北帝国大学	山内清男・小田島祿郎	長谷部 1925b
1925年 8～9月	A・A'・B・C地点	東北帝国大学	長谷部言人・小金井良精・大山 柏・八幡一郎 池上啓介・小田島祿郎	長谷部 1925b
1935年 9月	A・B地点		角田文衛	角田 1935
1951年 6月	A・A' 地点境界		東 登・菊池啓治郎	大船渡市教委 2000
1956年 4月	A・A' 地点	慶応義塾大学	江坂輝彌・可兒弘明・東 登・吉田義昭 ほか	江坂 1956
1958年 10月	A地点	早稲田大学	西村正衛・金子浩昌・中村恵次・和田 哲ほか	西村 1962
1960年 8～9月	A・B・C・D地点	慶応義塾大学	清水潤三・江坂輝彌・笹津備洋・近森 正・ 鈴木公雄・渡辺 誠・赤澤 威・高山 純 ほか	清水 1965
1966年 3月	県史跡に指定（対象面積：3,310 m ² ）			
1994・95年	C地点	大船渡市教委	金野良一・及川 洵 ほか	大船渡市教委 1997
1996～98年	B地点	大船渡市教委	金野良一・及川 洵 ほか	大船渡市教委 2000
2001年 8月	国史跡に指定（対象面積：20,434 m ² ）			
2001～03年	A地点	大船渡市教委	及川 洵・金野良一・氷見淳哉 ほか	大船渡市教委 2004

B地点は、1925年8月の第2次調査、1935年9月の角田文衛氏の調査、1960年9月の慶応義塾大学（BKトレンチ）の3回の調査が実施されており、その他に1996～1998年大船渡市教育委員会により貝層（大洞B2～C1式）が精査されている（96B1区）。大洞B式の標式地点であるが、1925年8月の第2次調査の出土土器が指標となっており、以降の調査でも同式の貝層が確認されている。

C地点は、1925年4月の第1次調査、同年8月の第2次調査、1960年8～9月の慶応義塾大学（CKトレンチ・CE区・CI区）の3回の調査が実施されており、その他に1994・1995・2000年に大船渡市教育委員会による確認調査が実施されている。道路西側の貝塚は部分的に原堆積貝層が確認されたものの、過去の調査区で大半が掘り尽くされていた。斜面下位の南側区域は湧水が顕著で、有機質遺物が埋存する可能性も考えられる。大洞C1・C2式の標式地点であるが、1925年4月と8月の調査で貝層から出土した土器が指標となっている。

D地点は小規模な貝塚で、1958年10月の早稲田大学の調査で測量図に記録され、1960年8～9月の慶応義塾大学の調査で、貝層はほぼ完掘されたとされている。1996年に大船渡市教育委員会によりボーリング調査が実施され、貝層の範囲（約170 m²）が図示されている（図6）。1960年の調査区の一部は宅地造成区域に入っていると推定され、本来の貝塚の範囲はもう少し広がっていた。

8 大洞貝塚の推移とその性格

大洞貝塚は1994年の大船渡市教育委員会による調査以前、7回にわたって調査が実施されてきた。遺憾ながらその成果は報告書として公表されることはなかったが、筆者が知り得た資料から、これまでの調査内容を整理すると、地点毎の年代的な変遷がある程度推定可能である。

A地点は、貝塚中央部から東側に後期後葉から大洞B式にかけての貝層、西側は大洞A式の貝層と下部に後期後葉の貝層が検出され、西側が新しくなる。A'地点も同様に西に向かうに従い新しい文化層が形成されており、貝層は大洞B～C2式に形成され、また西端では大洞A'式の包含土層が認められた。

B地点は、大洞B～A'式までの貝層が検出され、大洞貝塚の中では最も時間幅をもって形成された貝塚で、検出された埋葬人骨が7体と最多となる。貝層は西側が薄く、東方に厚く堆積する。

C地点は、大洞C1・C2式の貝層が検出され、特に同C2式土器が多く出土し、他の型式は僅少であった。北側斜面の貝塚（A・A'・B地点）よりも短期間の貝塚であるが、骨角器類は最も豊富に出土し、人骨も4体検出されている。これまでの調査で貝層のかなりの部分が掘り返され、地表面の現況も盛土されており、遺存状況が良好とは言い難い。

D地点は、後期後葉から大洞B式にかけて貝層が形

表 3 大洞貝塚地点別の貝層形成時期

時期 地点	後期中葉	後期後葉	大洞 B 式	大洞 BC 式	大洞 C1 式	大洞 C2 式	大洞 A 式	大洞 A' 式
A 地点	---	■	■	---	- (?) -	---	■	- (?) -
A' 地点	- (?) -	---	■	■	■	■	- (?) -	---
B 地点	---	---	■ (?)	■ (?)	■	■	■	■
C 地点					■	■		
D 地点	---	■	■					

貝層形成
 包含層形成

成され、大洞貝塚の中では A 地点と共に初期に形成されたが、短期間で終了した。最も規模が小さく、貝塚本体は 1960 年の調査でほぼ完掘されたが、炉跡遺構や埋葬人骨、埋葬犬骨が検出された。

以上をまとめたものが、表 3 である。山内清男氏は晩期の土器型式として、大洞貝塚の地点名に因んで大洞 B 式、大洞 C 式 (旧・新)、大洞 A 式、大洞 A' 式と命名したが、それぞれの型式名が発掘地点を代表する資料をもって当てられたことは、後年の発掘資料からも追認できる。大洞貝塚には大洞 BC 式の土器自体が少なく、ややまとまって検出されたのは 1956 年調査の A' 地点のみであったと推測される。大洞 BC 式は山内氏が大洞貝塚の B 地点と C 地点の土器の間の型式的な開きを、主な文様要素である三叉文から羊歯状文への変遷の中に、型式の連続性を見出し設定した経緯がある。その僅少性が年代差に起因するのか、地域性によるものなのか、課題として残されており、1960 年に芹沢長介氏が「雨滝式」を設定し問題を提起した (芹沢 1960)。雨滝式を巡る一連の動静については、拙書の中で詳述している (小林 2010 : 第 4 章)。

長谷部氏調査時の目的の一つに、人骨の収集が上げられていた。埋葬人骨は 1925 年の山内氏の調査で C 地点より 4 体 (その内埋葬原位置を保つものは 1 体)、同年の長谷部氏の調査で B 地点より 6 体と土器棺 4 基、A 地点から土器棺 2 基、1960 年の慶応義塾大学調査で B 地点より 1 体、D 地点より 1 体と土器棺 1 基が検出され、総数が人骨が 12 体、土器棺が 7 基となる。長谷部氏は大船渡湾付近の壮年の人骨に外耳道骨腫が見られることに着目したが、大洞貝塚では山内氏の 2 体 (C 地点)、長谷部氏の 1 体 (B 地点)、慶応大学の 2 体 (B・D 地点) に確認された。大洞貝塚ではホタテガイ等深水性の貝類

が多く出土していることから、江坂輝彌氏は外耳道骨腫が潜水漁法に起因する可能性を指摘した (江坂 1975)。この地域的偏倚が遺伝性なのか、冷水刺激によるものなのか確証は得られていないが、何らかの地方的因子が働いたと考えられている (百々 1972)。1996 年の大船渡市教育委員会の調査で、5 体の埋葬人骨 (壮年～熟年段階) が検出されたが、その内 1 体 (3 号人骨 : 女性壮年) に軽度の外耳道骨腫が確認されている (大船渡市教委 2000)。

大洞貝塚では、居住域が明らかになっていない。貝塚が傾斜部分に形成され、埋葬地としての性格も含有していたことから、居住域は別の地点に営まれた可能性が高い。貝塚と居住域の相互関係については判然としないが、D 地点の貝層下から炉跡遺構が検出され、居住施設と考えられる。また 1999 年の大船渡市教育委員会による「大洞貝塚丘陵鞍部西側」の調査で、竪穴住居跡の一部 (G4c6・7、G4d6・7 区) が検出され、翌 2000 年に調査区を拡張し、第 1 号住居址として精査された。その結果、南北約 5.7 m、東西約 4.5 m の楕円形の竪穴住居跡で、晩期中葉～弥生前期の住居跡に比定されている (大船渡市教委 2002)。地点を移しながら、長期にわたって居住が継続されていたと想定され、貝塚周辺の広範囲にわたる区域の確認調査が求められる。

大洞貝塚は、縄文時代後期後葉から晩期全般にわたって形成された地点貝塚である。同じ時期に営まれた大船渡湾周辺の有力な貝塚として、長谷堂貝塚・富沢貝塚・下船渡貝塚、湾口東側に宮野貝塚が位置している。これらは近似した生態系に属し、大船渡湾という地理的単位において同時期に並存した遺跡群として捉えられ、陸路または海路を通じて緊密な関係にあったと推定される。また南方に隣接した広田湾では中沢浜貝塚と瀬貝塚、

更には気仙沼湾に田柄貝塚が位置しており、いずれも時期的に大洞貝塚と並行し、埋葬人骨の検出や豊富な骨角器類の出土といった共通項を有している。自然環境や地域社会を考慮に入れた領域分析を通して、遺跡群内から遺跡群間、更には文化圏へと範囲を広げた組織的研究が求められている。それには個々の遺跡の遺物・遺構の徹底した考察が基本となっており、大洞貝塚のこれまでの調査資料の公表が待たれるところである。

9 おわりに

最後に、山内清男氏の亀ヶ岡式土器研究と大洞貝塚の関わりを確認しておきたい。

1925年の大洞貝塚の調査資料から、山内清男氏によって1930年に亀ヶ岡式の年代の変遷が明確にされた(図7)。上記したように、同貝塚のB・C・A・A'地点から出土した土器を基に六つの型式に細分されたが、後年大洞B式・BC式・A式が更に二分され、亀ヶ岡式土器は9型式に細分された(山内編1964)。また大洞A'式の地方差を示した土器として、「松島福浦島下層の土

器」が紹介された(山内1930)。山内氏は福浦島貝塚(宮城県)の下層において、大洞A'式に共伴して磨消縄文の土器が出土したことを指摘したが、同貝塚の発掘調査は1929年11月(日付不明)に実施されており、調査直後の成果が1930年5月発表の論文(山内1930)に反映されたことになる。

山内氏が土器型式の細分で取った手法は、以下の三段階に整理されている(高橋1999:186頁)。

- ① 貝塚などにおける同一地点での層位的上下関係の比較
- ② 近接地点別での型式比較
- ③ 異なる遺跡間の比較

このうち大洞諸型式の設定で実践されたのは①と②の方法であり、大洞BC中間型式(未命名の一型式)は大洞貝塚に材料が僅少であったため、③の方法が採用された。同式はB地点出土の土器とC地点出土の土器の間の特徴を有した型式として、型式学的理解(入組三叉文から羊歯状文への変化)から導出されたが、主には是川中居遺跡(青森県八戸市)と藤株遺跡(秋田県北秋田市)の土器が参考に供された。前者については、1926年4月に是川一王寺貝塚の調査で、山内氏は長谷部氏と共に現地を訪問しており、地元の素封家泉山家(岩次郎・斐次郎兄弟)が所蔵する是川中居遺跡出土の亀ヶ岡式土器に接する機会があった(泉山兄弟の南低湿地泥炭層の発掘は同年11月に実施)。また後者については、1925年5月に東北帝国大学法文学部内に奥羽史料調査部が設置され、喜田貞吉氏(1871-1939年)の尽力により、1929年3月2日付けで亀ヶ岡式土器の優品からなる実業家久原房之助氏のコレクションが同部に寄託されており(須藤編2007:資料編2頁)、その主体であった藤株遺跡の土器を観察することが可能であった。山内氏の大洞BC式の設定には上記した背景があり、論文発表直前までの成果が盛り込まれたことになる。

多様な器種や文様要素で構成される亀ヶ岡式土器は、種々の属性の消長とそれらの組み合わせから、型式変遷の区分が求められる(表4)。多様な属性の中には、時間軸において細かな変遷を遂げるものもあれば、複数型式にわたって連綿と続くものも少なくない。また一つの属性が単一の型式を区分するメルクマールになり得るとは限らず、複数の有力な属性が同時に置換する例も稀で

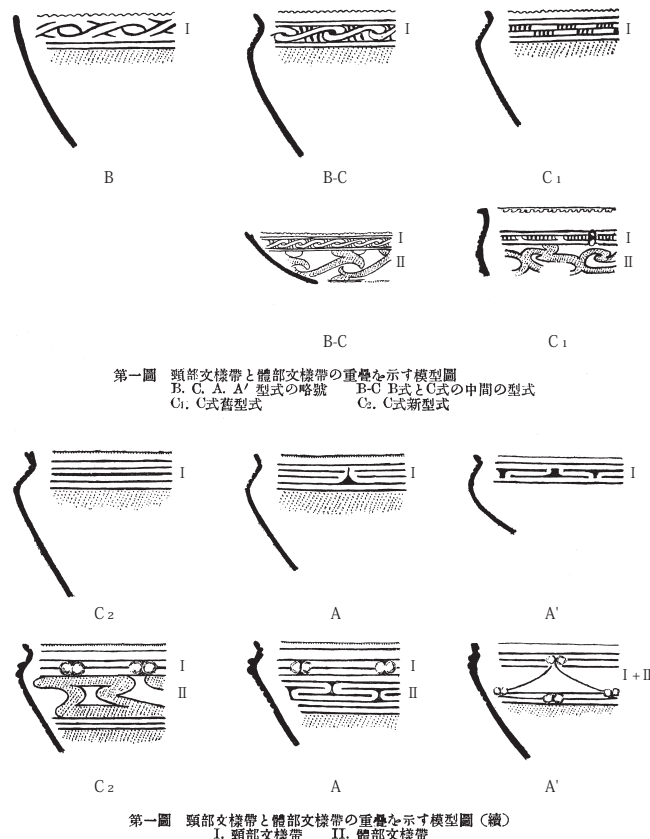


図7 頸部文様帯と體部文様帯の重疊を示す模型図(山内1930)

表 4 山内清男による大洞諸型式の分類基準 (高橋 1999) 改変

器種と属性 型式細分		鉢形				壺形	急須形			香炉形
		突起	口縁	頸部	体部文様	口縁	形態	頸部文様	形態	
山内 (1930)	山内 (1964)	B 突起 B 形突起列 A 突起	薄い口縁 厚い口縁 口上端の溝 口内側の溝 口内側溝からの枝 口外側溝からの枝	頸部文様帯直上の文様 羊歯状文 截痕 細かい点列 二溝間の截痕 溝底の刺痕 肩部の隆線	曲線的磨消文様 平行化過程の磨消縄文 並行線の文様 磨消縄文	口唇上沈線 口外側の隆帯	肩の区画 肩の帯状隆帯 平低化 丸底 平底 体部が無文壺形	沈線 羊歯状文 磨消縄文	肩の隆帯化 肩の区画	
	B1									
	B2									
	BC1									
	BC2									
	C1									
	C2									
	A1									
	A2									
	A'									

ある。このような多様性と複雑さが相俟って、亀ヶ岡式土器の理解を困難なものにしている。従ってそれぞれの属性の消長を跡づけ、属性同士の対応関係や特定器種との結び付きといった規則性を追求することが、型式区分を考える上で重要な検討課題となっている。山内氏が示した分析手法はその模範的な実践例であり、一世紀近くが経過した今日においても重要な研究指針である。

註

- 1) 熊谷常正氏は、1924年に岩手県内務部長名で管内の気仙郡長・盛警察署長宛に発した文書『史蹟保存に関する通牒』に、「赤崎村大洞所在貝塚」と「同(村)舞良所在貝塚」と別記されていたことから、丘陵の北斜面に該当する部分(A・A'・B地点)の「大洞貝塚」と、南斜面のC地点を中心とした「舞良貝塚」とに区分され、この頃までは「大洞」地点の貝塚より「舞良」貝塚の方が、一般に貝塚地点として認識されていたと指摘している(大船渡市教委 2000: 17頁)。
- 2) 鳥羽源藏氏(1872 - 1946年)は気仙郡小友村(現陸前高田市小友町)の出身で、1899年頃から地元の小学校教員の傍ら在京の研究者に師事し、博物学(植物・岩石・貝類等)を学んだ。1908年に台湾に渡り台湾総督府農事試験場などに勤務した後、1911年に地元に戻り、1922年からは岩手師範学校教諭として博物学を講じており、1923年に岩手県史跡名勝

天然記念物調査委員に任命されている(岩手県教委 1998: 1 - 2頁)。1919年の長谷部言人氏の細浦上ノ山貝塚の発掘調査は鳥羽氏の斡旋によることが記されており、同貝塚等の貝類の同定にも関わっている(長谷部 1927b: 206 - 214頁)。なお1908 - 1911年の台湾渡航は、1902年から台湾総督府学務課に勤務していた八木柴三郎氏(1866 - 1942年)の知遇を得たことによる可能性も考えられる。

- 3) 気仙地方の遺跡で発掘された土器片が京都大学に収蔵された理由としては、山内清男氏が東北帝国大学に着任する以前で、長谷部氏の調査は人骨の収集に主眼があり土器に対する関心が希薄であったこと、当時京都帝国大学による国府遺跡(大阪府)や津雲貝塚(岡山県)の調査にも関与し、また長谷部氏自身が1906 - 1910年に同大学医科大学解剖学教室(足立文太郎教授)に助手・助教授として在職していたことが勘案される。長谷部氏は1920年東北帝国大学医学部教授(解剖学第二講座)に昇格し、1921 - 1922年にドイツに留学したため、この間の国内での活動は空白となり、その後1925年の大洞貝塚の調査に至るが、帰国後は石器時代人骨の抜歯(長谷部 1923)や外聴道骨腫に関する研究(長谷部 1925a)を発表している。なお東北帝国大学は大学令の施行により、1919年4月「分化大学制」から「学部制」に改組した。
- 4) 小田島祿郎氏(1881 - 1953年)は二戸郡浄法寺村(現二戸市浄法寺町)の出身で、岩手郡一方井小学校(現岩手町)の校長在職中の1922年8月に、岩手県史跡名勝天然記念物調査委員に任命されている。翌年4月気仙郡広畑小学校の校長として赴任してから、貝塚調査に精力的に取り組むようになり、1924年の柴田常恵氏の気仙郡と宮古地方の史跡踏査に際しては、小田島氏が対象遺跡の選考や管内関係資料の見学を手配

- したと推定されている。1936年に出身地の浄法寺村に転居してからは、考古学的活動から距離を置くことになった。
- 5) 1925年4月の第1次調査で山内氏が検出した人骨2体については、長谷部氏が同年9月に細浦上ノ山貝塚の3体と共に逸早く報告している(長谷部 1925a)。
- 6) 小金井氏等の一行は、大洞貝塚の発掘見学の後、8月29日(土)に関谷洞穴、下船渡・細浦・中沢浜・門前貝塚を巡回し、翌30日に熊穴洞穴の小発掘を試み、31日中尊寺に詣でて、9月1日(火)に帰京した(大山・八幡 1925)。一行の調査旅行は約2週間の行程となる。なお大山氏は1924年2月にドイツ留学から帰国したばかりで、国内の旧石器時代の存否を巡って洞窟遺跡に関心を寄せていた。
- 7) 大船渡市教育委員会のC地点の調査で、貝層が掘り切られていなかったことが確認されている。「ハ区」はママより南方3m、深さ1.5mで湧水のため発掘できなかったことを長谷部氏が報告しており、区画名は明らかにされていないが、水底から「完全土器」を得たことも記されている。
- 8) (山内 1929)には、以下の記述がある。「気仙郡末崎村細浦貝塚は大正十四年発掘したが、この貝塚の材料中にも繊維土器があることが後に検出された。私の発掘地点は表土、貝層、褐色土層、黒色土層の重畳があった。繊維土器は褐色又は黒色土層の土器中に多少混入して居る。人骨は黒色土中にあったが、人骨伴出の土器破片の過半は繊維土器、他は所謂薄手式(加曾利Eに並行)である。褐色土層以上には所謂薄手式、亀ヶ岡式のあるものが出土する。」(山内 1967: 56頁)。従って「細浦貝塚上層」(貝層)の土器は、「所謂薄手式、亀ヶ岡式のあるもの」を指示していると思われる。
- 9) B地点から略完形の大洞BC2~C1古式の香炉形土器が出土したが、それに対し長谷部氏は、「第八号人骨の脚の附近これより十五糎ばかり浅く香爐形土器を得た(以下略)」(長谷部 1925b: 358頁)と報告した。第8号人骨は「ロ区」で検出された赤色顔料付着の熟年男性の屈葬人骨で、東方に向けた膝関節付近で香炉形土器が出土したことが、写真図版(PL XII, 下段)から読み取れる。なお第8号人骨は「大洞C式土器」より古相の「細浦土器」文化層に属する可能性が指摘されており、この人骨より15cm程度浅く出土した記述に基づくならば、人骨と同期またはそれ以降に位置づけられるであろう。
- 10) (長谷部 1925b)は、調査終了一月足らずでまとめ上げられている。出土品の洗浄作業が完了しない状況で報告されたため、資料の吟味が不十分で、遺物の数量も実態と乖離している。また1925年10月24日の人類學會例會での演述については、(長谷部 1927a: 310頁)に記されている。その他に大洞貝塚の骨角匕(長谷部 1925c)、燕形銚頭(長谷部 1926)、土器棺葬(長谷部 1927a)、犬骨(長谷部 1929)、貝塚オオカミ(長谷部 1941)について、長谷部氏が断片的に報告している。
- 11) 1956年6月大船渡市教育委員会刊行の『大洞貝塚』は、(盛岡市遺跡の学び館 2015)に再録されている。発掘調査は江坂氏を調査責任者として、可兒弘明氏(後に慶応義塾大学文学部東洋史学専攻教授)等の学生3名と東登・吉田義昭氏が参加している。
- 12) 西村正衛氏が公表した大洞貝塚の測量図には、Dトレンチの位置が明示されていない(西村 1974: 第23図)。DトレンチはCトレンチの北東約3mの地点に開設されており、1956年慶応大学調査の第2トレンチの東側が該当すると推定される(図6)。またAトレンチは2001~2003年の大船渡市教育委員会の調査で、位置が特定されている(大船渡市教委 2004)。発掘調査は西村氏を調査責任者として、金子浩昌・中村恵次・和田哲氏等が参加しており、当該調査の出土品については写真図版(総数556点)が作成済みで、西村氏のご配慮で参照させていただいた。
- 13) 1960年8月の慶応義塾大学の調査の目的に、「大洞土器の編年研究」が加えられた背景には、芹沢長介氏による「雨滝式」の設定があったと推察される。同氏が提唱された『石器時代の日本』は同年6月に刊行されており、大洞貝塚の調査はその直後に実施されたことになる。この調査には、松本信廣氏(文学部東洋史学専攻教授)を調査責任者として、清水潤三氏(文学部国史学専攻助教授)と江坂輝彌氏(文学部東洋史学専攻助手)の指導のもと、当時大学院生・学部生であった笹津備洋・近森正・鈴木(当時町田)公雄・渡辺誠・赤澤威・高山純氏等の錚々たるメンバーが参加しており、清水氏と江坂氏が同じ遺跡を共同で調査するのは異例であった。また調査を主導した江坂氏は当時40歳で、同年4月に代表的著作『土偶』を上梓したばかりで、研究者として最も充実した時期にあった。同年5月24日に大船渡市は「チリ地震津波」の被災地となったが、その直後にもかかわらず、オール慶応の体制で調査が敢行されており、著名遺跡に臨む強い意気込みが感じ取れる。しかしその勢いが整理事業に継承されなかったことは遺憾と言わざるを得ない。なお1960年調査の出土品と調査日誌については、慶応義塾大学文学部民族学考古学研究室のご配慮で実見・閲覧させていただいた。
- 14) 慶応義塾大学の1960年の調査では、調査区の名称を地点名と大学名「K・E・I・O」の一文字を冠して呼称し、その後には区画名(アラビア数字)を付与した。なお安孫子昭二氏は嘗て後期最終末の型式として、A地点AKトレンチの資料を基に「大洞K式」を提唱したが、型式名はトレンチ名由来のものであった(安孫子 1967)。
- A地点-AKトレンチ「AK1~4区」
B地点-BKトレンチ「BK1~4区:3区未調査」
C地点-CKトレンチ「CK1~6区」・CE区・CI区
D地点-DEトレンチ「DE1~3区・DE拡張区」・DIトレンチ「DI1・2区」・DOトレンチ(DO1・2区)
- 15) D地点の範囲は1958年の早稲田大学調査の測量図(西村 1974: 第23図)で図示されたが、慶応義塾大学の調査日誌(8月26日)には、「東登氏ノ発見シタモノ(従来ノ報告ニナシ)」と記されている。なお早稲田大学の測量図には、C地点の貝層の範囲が図示されていない。

引用文献

- 安孫子昭二 1967 「谷定出土の深鉢とその編年位置について」『庄内考古』第6号(特集 縄文後期~晩期土器の研究) 庄内考古学談話会
- 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期後半の土器様式~所謂「コブ付土器」の編年~」『石器時代』第9号 pp.87-104 石器時代文化研究会
- 阿部芳郎 2004 『失われた史前学』 岩波書店
- 岩手県教育委員会 1998 『岩手の貝塚』(岩手県文化財調査報告書第102集)
- 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 『上鷹生遺跡発掘調査報告書-鷹生ダム建設関連遺跡発掘調査-』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第253集)
- 江坂輝彌 1956 『大洞貝塚』(社教シリーズ第7集) 大船渡市教育委員会 <<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/33197>> (2022/05/06 アクセス)
- 江坂輝彌 1960 『土偶』 校倉書店
- 江坂輝彌 1961 「岩手県大船渡市大洞貝塚」『日本考古学年報 9 昭和31年度』 pp.61-62 日本考古学協会
- 江坂輝彌 1975 「学史上における長谷部言人の業績」『日本考古学選集 15 長谷部言人集』 pp.1-8 築地書館
- 大船渡市 1978 『大船渡市史 第1巻 地質編・考古編』
- 大船渡市教育委員会 1997 『岩手県大船渡市 大洞貝塚平成6・7・8年度範囲確認調査概報』
- 大船渡市教育委員会 2000 『岩手県大船渡市 大洞貝塚 範囲確認調査報告書』
- 大船渡市教育委員会 2002 『岩手県大船渡市 大洞貝塚 平成

12・13年度内容確認調査報告書』
 大船渡市教育委員会 2004 『岩手県大船渡市 大洞貝塚 平成13・14・15年度内容確認調査報告書』
 大船渡市教育委員会 2016 『岩手県大船渡市 大洞貝塚 長洞遺跡 平成27年度緊急発掘調査報告書』
 大山柏・八幡一郎 1925 「岩手県南部石器時代遺跡調査旅行」『人類学雑誌』第40巻第10号 pp.360-364 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 岡田康博・永嶋豊 2009 『宮城県室浜貝塚資料・宮城県福浦島貝塚資料・宮城県橋本岡貝塚資料 山内清男考古資料17』(奈良文化財研究所史料第84冊) 奈良文化財研究所
 小田野哲憲・熊谷常正・高橋信雄 1982 『岩手の土器一県内出土資料の集成一』 岩手県立博物館
 気仙沼市教育委員会 2021 『台の下貝塚一防災集団移転促進事業・災害公営住宅整備事業(大沢A地区)に伴う発掘調査報告書2一』(気仙沼市文化財調査報告書第24集)
 小林圭一 2010 『亀ヶ岡式土器成立期の研究一東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式一』 早稲田大学総合研究機構 先史考古学研究所
 小林圭一 2018 「松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態」『研究紀要』第10号 pp.23-42 山形県埋蔵文化財センター
 小林達雄編集・小川忠博撮影 1989 『縄文土器大観 4 後期晩期 続縄文』 小学館
 清水潤三 1965 「岩手県大船渡市大洞貝塚」『日本考古学年報 13 昭和35年度』 pp.92 日本考古学協会
 鈴木公雄・林謙作編 1981 『縄文土器大成 4 晩期』(芹沢長介・坪井清足監修) 講談社
 須藤隆編 2007 『東日本縄文・弥生時代集落の発展と地域性一平成17～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)研究成果報告書一』(課題番号17520515) 東北大学大学院文学研究科
 芹沢長介 1960 『石器時代の日本』 築地書館
 高橋龍三郎 1999 「東北地方 晩期(亀ヶ岡式)」『縄文時代』第10号(特集縄文時代文化研究の100年) 第1分冊 pp.178-196 縄文時代文化研究会
 角田文衛 1935 「陸奥における二、三の薄手式土器」『考古学評論』第1巻第2号 東京考古学会(1986年6月刊『角田文衛著作集1 古代学の方法』 pp.326-347 法蔵館)
 百々幸雄 1972 「北海道の古人骨にみられる外耳道骨腫」『人類学雑誌』第80巻第1号 pp.11-22 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 鳥羽源藏 1900 「陸前國氣仙郡小友村発見の遺物に就て」『東京人類学会雑誌』第15巻第168号 pp.243-248 東京人類学会〈東京人類学会雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1887/-char/ja>〉
 中村五郎編 1996 『画竜点睛一山内清男先生没後25年記念論集一』 山内清男先生没後25年記念論集刊行会
 中谷治宇二郎ほか 1925 「雑纂一下總橋貝塚遠足會の記一」『人類学雑誌』第40巻第12号 pp.463-471 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 西村正衛 1962 「岩手県大船渡市大洞貝塚」『日本考古学年報 11 昭和33年度』 pp.58-60 日本考古学協会
 西村正衛 1974 「貝塚と集落」『日本考古学の現状と課題』(日本歴史学会編) pp.42-59 吉川弘文館
 長谷部言人 1923 「石器時代人の抜歯に就て 第二」『人類学雑誌』第38巻第6号 pp.239-249 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1925a 「陸前氣仙郡大船渡灣附近の石器時代人に

外聽道骨腫多し」『人類学雑誌』第40巻第9号 pp.321-326 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1925b 「陸前大洞貝塚(發掘)調査所見」『人類学雑誌』第40巻第10号 pp.349-360 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1925c 「骨角匕」『人類学雑誌』第40巻第11号 pp.398-405 日本人類学会
 長谷部言人 1926 「燕形鋸頭」『人類学雑誌』第41巻第3号 pp.141-145 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1927a 「石器時代の死産兒埋葬」『人類学雑誌』第42巻第8号 pp.309-315 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1927b 『先史学研究』大岡山書店
 長谷部言人 1929 「石器時代家犬に就いて(追加第三)」『人類学雑誌』第44巻第5号 pp.163-174 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 長谷部言人 1941 「石器時代遺跡出土日本産狼二種」『人類学雑誌』56巻第11号 pp.590-602 日本人類学会〈人類学雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1911/-char/ja>〉
 盛岡市遺跡の学び館 2015 『大船渡市大洞貝塚 昭和31年発掘調査出土遺物図録(盛岡市遺跡の学び館所蔵資料)』(<https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/33197>) (2022/05/06 アクセス)
 八木英三郎 1899 「東北地方に於ける人類學的旅行」『東京人類学会雑誌』第15巻第163号 pp.1-21 東京人類学会〈東京人類学会雑誌-J-Stage <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/ase1887/-char/ja>〉
 山内清男 1929 「關東北に於ける纖維土器」『史前学雑誌』第1巻第2号 pp.117-146 史前学会(1967年6月刊『山内清男・先史考古学論集・第二冊』 pp.49-74 先史考古学会)
 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 pp.1-10 (pp.130-157) 東京考古学会(1967年7月刊『山内清男・先史考古学論集・第三冊』 pp.113-132 先史考古学会)
 山内清男編 1964 『日本の原始美術 1 縄文式土器』 講談社
 横山浩一・佐原真 1960 『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第1部 日本先史時代』 京都大学文学部
 陸前高田市教育委員会 2003 『川内遺跡発掘調査報告書』(陸前高田市文化財調査報告第25集)

図版出典

図1・2:国土地理院発行(1996年3月)「1:500,000 地方図(3) 東北」をベースに作成した。
 図3:(小林2018:図11)一部改変
 図4:国土地理院発行2万5千分1地形図「盛・越喜来・大船渡・綾里」に相当する『電子地形図25000(オンデマンド版)』(2021年3月8日調整)を25%に縮小しベースとして、『いわてデジタルマップー土地利用規制図(文化財)』([https://www.sonicweb-asp.jp/iwate/map?them=th_64#pos=141.7658986826209%2C39.047154794272906&scale=120000&clip=6381\(th_64\)%3A5956105%3A102225](https://www.sonicweb-asp.jp/iwate/map?them=th_64#pos=141.7658986826209%2C39.047154794272906&scale=120000&clip=6381(th_64)%3A5956105%3A102225))を参照して遺跡をプロットした。
 図5:(小林2010:図283)改変
 図6:(小林2010:図284)改変
 図7:(山内1930)一部改変
 表1:小林作成
 表2:小林作成
 表3:小林作成
 表4:(高橋1999:第1表)改変